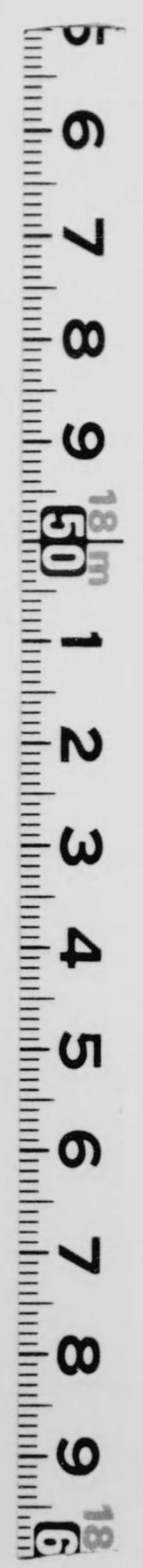
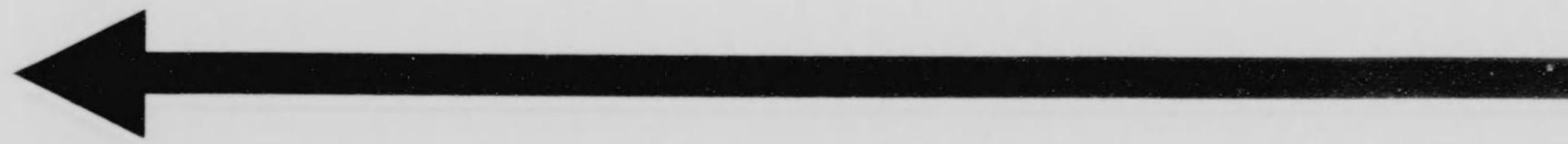


362  
27



始





巖松堂書店編輯部編纂

文官高等外交官  
判事檢事辯護士

受驗提要

東京

巖松堂書店發兌



362-27

巖松堂書店編輯部編纂

文官高等外交官  
判事檢事辯護士

受驗提要

h. n. 4

內交

東京

巖松堂書店發兌



文官高等外交官  
判事檢事辯護士  
受験提要目次

緒論

第一章 本著ノ必要……………一

第二章 受験ノ要諦……………三

第三章 研究方法一般……………五

第一、各科ノ憑據ヲ定ムルコト——第二、答案練習ヲ爲スコト——第三、相互討論ヲ爲スコト——第四、法典ノ條文ヲ記  
憶スルコト

第一編 文官高等試験

第一章 文官ノ意義及種類……………一一

第二章 文官ノ任用及資格……………一三

目次



第三章 受験ノ資格……………一四

第四章 受験ノ準備……………一六

第五章 試験手續及受験上ノ用意……………二三  
 第一、試験ノ科目及其目的——第二、受験ノ手續——第三、  
 試験ノ執行——第四、文官高等試験委員

第六章 合格者ノ就職……………二七

第七章 關係法規……………二九  
 ◎文官任用令……………二九  
 ◎文官試験規則……………三一  
 ◎文官高等試験細則……………三五  
 ◎文官高等試験委員官制……………三八

第二編 外交官及領事官試験

第一章 外交官ノ意義及種類……………四〇

第二章 外交官トシテノ適格……………四四

第三章 受験ノ準備……………四七

第四章 試験手續及受験上ノ用意……………五〇  
 第一、論文試験——第二、第一次試験——第三、第二次試  
 験

第五章 合格後ノ注意……………五四

第六章 關係法規……………五六  
 ◎外交官領事官及書記生任用令……………五六  
 ◎領事官特別任用令……………五八  
 ◎外交官領事官及貿易事務官特別任用ニ關スル件……………五九  
 ◎通譯官ヲ外交官及領事官ニ任用ノ件……………六〇  
 ◎外交官及領事官試験規則……………六〇



◎外交官及領事官試驗規則施行細則……………六四

◎外交官及領事官試驗委員會官制……………六七

第三編 判事檢事登用試驗

第一章 司法官ノ意義及地位……………六九

第二章 判事檢事ノ資格及任用……………七一

第一、判事檢事ノ資格——第二、判事ノ任用——第三、檢事ノ任用

第三章 受験ノ準備……………七四

第四章 試驗手續及受験上ノ用意……………七六

第一、判事檢事試驗委員——第二、受験資格——第三、第一回試驗——第四、實地修習——第五、第二回試驗

第五章 合格者ノ就職……………八二

第六章 關係法規……………八四

◎裁判所構成法(摘錄)……………八四

◎判事檢事登用試驗規則……………九〇

◎判事檢事登用試驗ノ豫備試驗ニ關スル件……………九七

◎判事檢事登用試驗規則第五條ニ依ル指定學校……………九八

第四編 辯護士試驗

第一章 辯護士ノ地位……………九九

第二章 辯護士ノ資格……………一〇一

第三章 辯護士ノ職務……………一〇二

第四章 辯護士試驗手續……………一〇四

第五章 關係法規……………一〇六

◎辯護士法(摘錄)……………一〇六



◎辯護士試験規則……………一〇八

◎辯護士試験ノ豫備試験ニ關スル件……………一一三

附錄 重要參考書目

第一 試驗準備書……………一一五

第二 憲法……………一一五

第三 行政法……………一一六

第四 刑法……………一一六

第五 民法……………一一七

第六 商法……………一一九

第七 民事訴訟法……………一二一

第八 刑事訴訟法……………一二二

第九 國際公法……………一二二

第十 國際私法……………一二三

第十一 經濟學……………一二三

第十二 財政學……………一二四

第十三 商業學……………一二四

第十四 商業史……………一二五

第十五 政治學及政治史……………一二五

第十六 外交史……………一二五

第十七 判決例……………一二五

第十八 雜誌……………一二六

文官高等外交官  
判事檢事辯護士  
受驗提要目次終



文官高等外交官  
判事檢事辯護士  
受験提要

巖松堂書店編輯部 編纂

緒論  
第一章 本著ノ必要

夫天下ノ萬人均シク横目縦鼻ニシテ身體狀貌相肖サル者莫シ然モ其行事ニ就テ之ヲ  
觀シ平或者ハ威權聲望一時ニ高ク廟堂ニ政ヲ議スルノ大臣タリ或者ハ犬豚ヲ以テ自ラ  
處シ賤役願使ニ甘ンスルノ奴隸タリ或ハ落魄零丁身ヲ寄スル所ヲ失ヒテ饑寒ニ泣クノ  
乞兒アリ或ハ肥馬ヲ驅リ高樓ニ座シ輕暖ヲ衣テ佳肴ニ飽クノ富者アリ蓋シ人々天ニ享  
クルノ性相異ナルニ非スシテ而モ其差フコト斯ノ如キ所以ノモノハ何ソヤ他ナシ其初  
メニ當リテ志ヲ立ツルト否ラサルトニ由ルノミ夫レ人志ヲ立ツレハ氣旺ナリ氣旺ナレ  
ハ事ニ接シテ倦ムナク事ニ接シテ倦ムナクンハ事滋々精シク業益々進ムニ至ル功業成



ル所以ナリ

是ニ由テ之ヲ觀レハ人ノ貧富貴賤ノ別ルル所ハ賦性ノ如何ニアラスシテ立志ノ如何ニ由ルモノタルコトヲ知ラン我國文化ノ隆盛ナル未タ曾テ今日ノ如キハアラス然リ而シテ文化ノ隆盛ハ社會生活ノ複雜ヲ致シ從テ之ニ應スルノ職業モ亦複雜ナラサルヲ得サルニ至レリ此間ニ處シテ事ヲ成シ名ヲ揚ケント欲セハ須ク先ツ自己ノ材能ヲ量リ嗜好ニ稽ヘ其他身邊ノ事情ヲ審カニシテ人生ノ目的ヲ達スヘキ唯一手段タル職業ノ選擇ヲ爲サスンハアルヘカラス

複雑ナル社會ニ應スル複雑ナル職業ハ之ヲ數百種ニ區別スルヲ得ヘシト雖モ今之ヲ大別スレハ官職公職其他ノ職業トスルヲ得ヘシ官職トハ上ハ大臣大將ヨリ下ハ下士屬僚ニ至ルマテ國家機關ヲ組織シテ國務ヲ處理スルノ事ニ任シ公職ハ各個人ノ權利ノ確認伸張ヲ圖ルヲ職トスル辯護士公證人等ト爲ス凡ソ此等ノ職務ハ人ノ均シク欲スル所ニシテ之ヲ希望スルモノ實ニ其所要ヲ超過スルコト甚タシク延テ競争ノ勢ヲ長シ種々ノ弊風ヲ生スルコトヲ免カレス是レ試験制度ヲ設ケテ之カ採用ヲ制限スルニ至レル所以ナリ

夫レ斯ク如ク之ヲ希望スル者益々多キヲ加ヘテ其試験ハ彌々難キニ進ミ之カ準備ヲ爲スノ學校モ漸ク多カラントス從テ之ニ志ス者カ學校ノ選擇ト其準備ニ應スル方法トハ亦之ヲ忽カセニスヘキニアラサルナリ

初メテ山ニ入ル者ハ道標ニ依リテ道ヲ知り海上ヲ往ク者ハ指針ニ依リテ航路ヲ知ル夫ノ試験場裡タル中原ニ鹿ヲ逐フ者、夫ノ一意希望ノ彼岸ニ達センコトヲ欲スル者ハ必ラスヤ亦山ニ道標ヲ覓メ海ニ指針ヲ備フルノ要ヲ感セスンハアラス然ルニ世公ニスルモノニシテ能ク此道標タリ指針タルニ足ルモノ稀ナリ是レ本書ノ出テサルヘカラサル所以ナリ

## 第二章 受験ノ要諦

立志ハ人生ノ顯晦ヲ定ムル所以ニシテ其目的ノ選擇ハ人生ノ趨向ヲ決定スル所以ナレハ宜シク其始メヲ慮リテ終リヲ慎マスンハアルヘカラス其目的ヲ定メ志ヲ決スルニハ明カニ其本ヲ格シ詳カニ其末ヲ致ササルヘカラス然ラサレハ物悉ク支吾シテ憂竟ニ吾カ身ニ及ハンは是ヲ之レ慮ラスシテ唯其高キヲノミ望ミ自己天賦ノ材能ヲ量ラス財力ヲ



察セスシテ妄リニ目的ヲ定メンカ身心徒ラニ之カ爲メニ憔悴シ憂愁頻リニ至リ終ニ失望ノ深淵ニ陥リテ身ヲ憾ミ世ヲ恨ミテ一生ヲ悲境ニ送ルニ至ルハ幾多事實ノ明カニ教フル所ナリ豈慎マサルヘケンヤ

凡ソ各部ノ科擧ニ應セント欲スル者ハ孰レモ其試驗科目ヲ履修メスンハアルヘカラス然リ而シテ其學科タル法律學ハ法螺ノ學問ニシテ粗枝大葉ノ研究ノミニテ事足レルカ如ク考フルモノナキニアラスト雖モ限リアル條文ヲ以テ限リナキ人事ヲ律スルノ學問ナレハ法理ノ錯雜ナル緻密ノ觀察力ト深厚ノ思考力トニ由ルニ非スンハ能ク其法理ニ通曉シテ法文ヲ完全ニ適用スル能ハス是ヲ以テ殊ニ周到緻密ナル注意ヲ以テ研究スルヲ要スレハ斯カル天才アル者ニシテ始メテ能ク成功ヲ期スルヲ得ヘシ從テ中學時代ニ於テ觀察力ニ富ミ數學特ニ幾何學ニ得意ナル者ノ如キ最モ適當ナルヘク如斯者ハ必ラス其才幹ヲ發揮スルヲ得ヘシ加之法學ニ志ス者天下ニ多ク從テ競爭者モ亦渺カラサルカ故ニ特ニ忍耐能ク衆ヲ凌クノ勇氣ト久シキ困苦ニ堪ユル身體ノ健全モ亦斯學ニ志ス者ニ必要ナル條件タリ若シ夫レ之ヲ省ミスシテ之ニ向ハンカ必スヤ失敗ニ歸スヘキヲ以テ希望ヲ抱クノ青年ハ善ク之ヲ考慮シテ然ル後ニ志ヲ決スヘキナリ次ニ考慮スヘキ

ハ家庭ノ事情ナリトス如何ニ才力卓絶スルモ家産ノ多寡其他ノ關係ニシテ相調和セスンハ半途ニシテ廢學スルノ事情ニ迫ラレテ幾年ノ勉學一朝ニシテ徒勞ニ歸シ九仞ノ功ヲ一簣ニ虧クノ悔恨ヲ貽サン若シ其志望ヲ貫徹スルニ確乎タル成算ナクンハ寧口速成ノ他ノ職業ヲ選擇スルニ如カサルナリ  
如上ノ諸點ニ注意シテ之ヲ選擇シタル上ハ所謂精神一到何事不成ノ覺悟ヲ以テ專心一意奮勵努力學ヲ爲メテ以テ試驗ニ應センカ年來ノ志望茲ニ成ルヲ得ン

### 第三章 研究方法一般

各種ノ試験ニ應セント欲スル者ハ先ツ通常適當ノ學校ヲ選ンテ之ニ入り幾年ノ課程ヲ了ヘテ後ニ場屋ニ臨ムヘシ而モ學校ノ教課ハ大抵一律ナル通念ノ養成ニ在リ之ヲ以テ直チニ受驗ノ能力足レリト謂フコトヲ得ス須ラク進ンテ一層效果アル研鑽ヲ重ヌヘキナリ然レトモ校門ヲ出テテヨリ年月ヲ經ルニ從ヒ漸ク書案ニ遠カルハ人情ノ免カレサル所ナルヲ以テ所謂無謀ノ譏ヲ估フトモ卒業後最モ近キ機會ニ於テ試場ニ臨ムヲ可トス不幸ニシテ第一回ノ落第ヲ見ルモ其經驗ニ得ル利益ハ半年ノ讀書ニ優ルモノアルヘ



シ而シテ各科ノ研究ハ重要ナル参考書ノ精讀ヲ必要トスルコト勿論ナリト雖モ眞ニ明確ナル理解ヲ得ルニハ讀書以外種々ナル方法ヲ盡ササルヘカラス從來受験者ノ實驗シタル所ニ基キ比較的效果ノ大ナル研究ノ方法ニ就キ少シク之ヲ述ヘン

第一 各科ノ憑據ヲ定ムルコト

各科ヲ通シ倚頼スヘキ良著ハ多シト雖モ悉ク之ヲ精讀スルハ至難ノ業タルノミナラス却テ自己ノ統一アル觀念ヲ形ルノ妨ケト爲ルヘシ是ヲ以テ各科ニ就キ先ツ自己ノ最も信賴スル學者ノ著書ニ憑據シテ充分ノ研究ヲ遂ケ傍ラ他ノ重要ナル著書ヲ引テ疑義ヲ剖解スルトキハ必ラス確乎タル信念ヲ生スヘク之ニ依テ試問ニ對セハ略ホ難解ノ憾ナキニ庶幾カラシテ其憑據トスヘキ書ヲ選フニ當リテ或ハ簡潔ノモノヲ以テ優レリト謂ヒ或ハ精細ノモノヲ以テ優レリト謂フモ一概ニ是非ヲ定ムル能ハス又學科ニ依リ輕重ナキニアラサレハ宜シク慎重ノ考慮ヲ費シ又先輩ノ言ニ聽キテ其重要ナルモノハ比較的精細ニ其輕微ナルモノハ比較的簡潔ニ要ヲ摘ミ綱ヲ放タサルコトヲ努ムヘシ最後ニ受験者ノ考慮スヘキ一點アリ各科目ニ付テ試験委員ノ著書若クハ講義アルモノハ必ス之ヲ一讀スルヲ忘ルヘカラス殊ニ其最近ニ於テ發表セラレタル論文ノ如キハ充

分精讀セサルヘカラス是レ必ラスシモ試験委員ノ所說ニ盲從スルカ爲メニハ非ス之ニ依テ愈々自說ヲ精研スルノ利アルノミナラス又必ラスヤ其試験委員ヲシテ一層答案ニ注意セシムルノ利アレハナリ

第二 答案練習ヲ爲スコト

凡ソ試験ハ限リアル時間ニ於テ豫見スヘカラル問題ヲ解決スルモノナレハ其答案作成ハ亦至難ノ業タリ與ヘラレタル問題ニ就テ縱令充分ノ知識ヲ有スル者ト雖モ能ク之カ表示ヲ爲スノ術ヲ會得スルニハ多少ノ習練ニ待タサルヘカラス從來實施セラレタル試験問題ニ付キ若クハ自ラ問題ヲ設ケテ之ニ對シ實際試験ニ於ケルト同一ノ時間ヲ限リテ答案ヲ試作スルコト回ヲ重ヌルニ至リテハ略ホ自己ノ筆力カ所定ノ時間内ニ幾許ヲ記スルニ足ルヤヲ了解スルコトヲ得ヘク殊ニ之ヲ反讀玩味スルトキハ自ラ其記述ノ中ニ要ト不要トノ點ヲ發見セン又其課題ト爲シタル關係事項ハ答案作成ニ依リテ腦裡ニ銘刻セラルルコト深ク其記憶ニ利益スル所甚大ナリトス若シ同志相寄リテ互ニ競ヒ互ニ論難批評スル所アラハ一層精鍊セラルルヤ必セリ又各科専門ノ講師ニ就テ其批評ヲ仰クカ如キモ一得策タルコト勿論ナリ



豫習ト實演トハ自ラ覺悟ニ差ナキ能ハス彼ノ劍法ヲ善ク學フ者ハ平常ノ練磨モ猶ホ白刃ノ下ニ在ルカ如シ新影流ニ所謂「稽古をは晴れにする」と思ふへき晴れこそ常と思ひとるべし」トハ取テ以テ鑑戒ト爲スニ足ル豫習ニ緩ナル者ハ必ラス實演ニ當リテ狼狽セサル者少ナシ豫習ニ嚴ナラハ必ラス實演ニ當リテ綽々タル餘裕アルヘシ  
 答案ノ作成ニ付テ先ツ熟慮ヲ要スルハ問題ノ要點ナリ之ヲ逸セハ百枚ノ記述モ盡ク白紙ト選フ無シ次ニハ答案ノ組織ナリ記スル所誤リナシト雖モ而モ順序ヲ失シ脈絡ヲ缺キ或ハ一所ニ彷徨シ或ハ多岐ニ亘リテ歸スル所ヲ喪フカ如キハ未熟ナル受験者ノ陷リ易キ病弊ナリトス故ニ必ラス筆ヲ執ルノ前少時ヲ答案組織ノ攻究ニ費シ先ツ大綱ヲ表記シ若クハ項目ヲ分解シテ然ル後ニ徐々ニ筆ヲ上クヘシ若シ此用意ヲ怠ランカ半途筆ヲ投シテ長大息セサルヲ得サラン

斷案ヲ先ニシテ理由ヲ後ニスル人アリ理由ヲ先ニシテ斷案ヲ後ニスル人アリ其可否素ヨリ概言スヘカラスト雖モ抽象的ノ問題ニ對シテハ後者ニ據ルヲ利トシ具體的若クハ實例的問題ニ對シテハ前者ニ從フヲ利トスヘシ  
 答案記述ノ長短モ數々受験者ノ惑フ所ナリト雖モ既ニ限リアル時間ヲ以テ課セラレタ

ルモノナレハ縦令胸中ニ多大ノ思索ヲ藏スルモ盡ク之ヲ表ハシ得ヘキニ非ラス試験委員ト雖モ素ヨリ受験者自ラ慮レルカ如ク多キヲ望ム者ニハアラス唯無用ノ字句ト誤解サレ易キ字句トハ絶對ニ之ヲ除クコトニ努ムヘシ受験者中往々多讀病ニ罹レル者アリ博識ヲ街フテ内外ノ學說ヲ羅列シ而モ之ニ不徹底ナル論評ヲ加ヘテ却テ自說ヲ立ツルノ礎ヲ崩スカ如キ痴ヲ學フコト多シ斯ノ如キハ試験ノ試験タル所以ヲ忘レタル者ト謂ハサルヘカラス文官高等試験ト云ヒ外交官領事官試験ト云ヒ判事檢事試験ト云ヒ辯護士試験ト云フハ是等ノ資格ヲ與フルニ付キ必要ナル學識ヲ有スルヤ否ヤヲ試験セントスルモノニシテ敢テ之ニ由リ大學者ヲ出サントスルニハ在ラス今學界ニ令名アル博士ニシテ曾テ文官高等試験若クハ外交官試験ニ落第ノ苦ヲ嘗メタル人ノ一二ニ止マラサルカ如キ實例ハ偶々以テ此間ノ秘訣ヲ教ユルモノニアラサランヤ

第三 相互討論ヲ爲スコト

問題ヲ掲ケテ相互ニ討論スルコトノ利益ハ亦答案練習ニ讓ラサルモノナリ殊ニ其理解ヲ進ムル點ニ於テハ其利答案練習ノ比ニ非ス然レトモ討論ハ終日若クハ連日之ヲ行フヘカラス毎週定日ニ於テ同志相寄り科目ヲ定メテ順次重要ナル問題ヲ論議セハ他ノ小



問題ハ隨テ之ヲ會得スルヲ得ヘシ

第四 法典ノ條文ヲ記憶スルコト

凡ソ法理ハ法典ノ條文ト乖離スルコトヲ許サス而モ條文ハ一字一句ト雖モ之ヲ輕視スルコトヲ得サルモノナリ縱令萬卷ノ書ヲ讀破シテ大體ノ法理ヲ曉ルト雖モ國ノ成法ニ親シムコトヲ忘ルルトキハ其論ニ憑據ナク畢竟空理空論ニ終ラン科題ニ對シ該當ノ條文ヲ記憶スルモノハ必ラス文ニ生氣アリ而モ其結論ヲ誤ルコトナシ然ラサル者ハ必ラス無益ノ勞苦ヲ費シ而モ彼岸ニ達スルコトヲ得ス其利ト其損一タヒ試驗ニ臨ミタル者ノ直チニ知ル所ナリ故ニ平常法典ノ條文ヲ記憶スルコトヲ努ムルハ勿論特ニ試驗前ノ數日ハ寧ロ浩瀚ノ書冊ヲ困讀スルコトヲ止メ法典ノ正文ヲ耽讀スヘシ

## 第一編 文官高等試験

### 第一章 文官ノ意義及種類

文官ニ廣狹二様ノ意義アリ廣義ノ文官ハ武官ニ對スルノ名稱ニシテ國家ノ機關ヲ組織シ國務ヲ處理スルナリ而シテ之ヲ狹義ノ文官技術官教官其他特別ノ名稱ヲ有スル文官ニ區別スルヲ得ヘシ茲ニ述ヘントスル文官トハ狹義ノ文官ノ意ニシテ夫ノ兵役ニ服スルカ如キ一般臣民ノ法律上ノ義務ニ基カスシテ國家ニ對シ身心ヲ捧ケテ國務ヲ行フ公法上ノ義務ヲ負フモノニシテ上ハ大臣ヨリ下ハ屬官書記ニ至ルマテ均シク是レ文官タルナリ而シテ其武官技術官教官ト異ナルハ一ニ其職トスル所ノ國務ノ内容ヲ異ニスルニ由ルモノトス

文官タルニハ其種類ニ因リ資格ニ從ヒ通常任命ニ因リテ官吏關係發生シ之ニヨリテ國務ヲ處理シ其他特別ノ服務ヲ爲スノ義務ヲ生スルト共ニ官吏タル地位ヲ承認セラレ且ツ其地位ヲ保持スル財産上ノ權利ヲ有スルニ至ルナリ然リ而シテ文官カ其義務ヲ盡ササル場合ニハ之ニ對スル責任ヲ負擔セサルヘカラサルモ亦當然ナリト謂フヘシ而シテ



其官吏關係ノ消滅モ亦一定ノ法規ニ依リテ支配セララルモノナルヲ以テ雇人ノ如ク上官ノ意思ノミニ由リテ其地位ヲ奪ハレサルナリ此等ノ事項ノ詳細ハ受験科目タル行政法ヲ研究セララルニ當リ自ラ明カナルニ至ルヘシ

前節ニ叙述シタル狹義ノ文官ハ裁判ナル形式ニヨリテ法規ノ適用ヲ目的トスル司法官ト法規ノ範圍内ニ於テ國家ノ目的ヲ達スル職務トスル行政官トニ大別スルヲ得ヘシ而シテ兩者ヲ區別スルノ標準ハ其處理スル國務ノ内容ト形式トヲ異ニスルニ在リトス本著ニ於ケル文官トハ司法官ヲ除キタル最モ狹義ノ文官即チ行政官ノ意ナリト雖モ此中ニ就テ外交官及ヒ領事官ニ關シテハ特別ノ試験制度ヲ存スルモノアルヲ以テ便宜之ヲ文官試験ト分別シ第二編ニ於テ説述セントス

又文官ハ其觀察ノ方面ヲ異ニスルニヨリテ高等官判任官ニ區別スルヲ得其高等官ハ親任式ヲ以テ叙任スル親任官ノ外等級ヲ九ニ別チ一等官二等官ヲ勅任官トシ三等官乃至九等官ヲ奏任官トス

行政文官中親任式ヲ以テ叙任セララル親任官トハ内閣總理大臣、各省大臣、樞密院議長、同副議長、同顧問官、大審院長、行政裁判所長官、會計検査院長其他特ニ親任ノ待遇ヲ

受クルモノニシテ其叙任ノ形式ハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣又ハ首席ノ大臣之ニ副署セル辭令ヲ交付セララルナリ

親任官以外ノ勅任官ハ各省次官、局長、法制局長官、府縣知事等ニシテ其辭令書ハ御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣之ヲ奉行ス奏任官ノ任官、叙等ハ内閣總理大臣之ヲ奏薦シ其各省及ヒ各省所屬ノ官廳ニ屬スルモノハ内閣總理大臣ヲ經由シテ主任大臣之ヲ奏薦シ其辭令書ハ内閣ノ印ヲ捺シ内閣總理大臣之ヲ宣行スルモノタリ

判任官トハ各省及ヒ府縣ノ屬官等ニシテ各省大臣府縣知事辭令ヲ交付シテ任命スルモノニシテ本書説述ノ範圍外ニ屬ス

## 第二章 文官ノ任用及資格

往昔ニ在リテハ士農工商ノ階級ヲ存シ其間截然タル別ヲ設ケテ各階級ハ容易ニ相侵スコトヲ得サリシト雖モ王政維新ノ後ハ四民平等ノ權ヲ付與セラレ憲法ノ制定セラレテヨリ日本臣民ハ法令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均シク文武官ニ任セラルヘキ旨ヲ定メラレ所謂人材登用ノ途啓カレシヨリ其智能俊秀ノ者ハ拔擢セラレテ能ク高官ノ地位ニ就



クヲ得ルニ至レリ然リ而シテ文化ノ進ムニ伴ヒ教育制度ノ進歩燦然タルヨリ幾多ノ秀才輩出シテ限リアル官位ヲ限リナキ人カ望ムヨリ所謂獵官ノ弊害モ生スルニ至リシヲ以テ其任用ノ條件トシテ文官任用令ナル法規制定セラレ其法規ニ定メラレタル資格アルモノニアラスンハ之ヲ任用スルヲ得サルコトナレリ而シテ其資格ニハ學術上ノ資格ト經歷上ノ資格及ヒ其他ノ資格トアリ其學術上ノ資格ハ特定ノ種類ノ官職ノ外ハ特定メラレタル資格試験ヲ必要トスルモノニシテ其資格ハ特定ノ種類ノ官職即チ特別任用ニテ採用スルヲ得ル官職以外ノ官職ニ採用スルノ前提タル要件ニシテ此資格ヲ備ヘタル者ニアラスンハ其職ニ採用スルヲ得サルナリ乃チ高等文官ニ任用セララルヘキ者ハ文官高等試験ヲ經テ其合格證書ヲ有シ判任文官ニ任用セララルヘキ者ハ文官普通試験ニ合格シタル者タラサルヘカラス

今茲ニ叙述セントスルハ文官高等試験ノ内容及ヒ其準備方法ニ限ル

### 第三章 受験ノ資格

試験合格者ニハ官吏ニ任用セララルノ資格ヲ付與スルモノナルヲ以テ身分上社會ノ信

用ナク官吏タルノ威嚴ヲ保持スル能ハサル者及ヒ普通學ノ素養アル者ニアラサレハ應  
試スルコト能ハス其要件左ノ如シ

#### (甲) 身分上ノ要件

左ノ各號ノ一ニ該當セサルモノタルヲ要ス

- 一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者
- 二 破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限リノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

上記ノ外年齢等ヲ制限スル特別規定ナキヲ以テ未成年者ト雖モ下記ノ要件ヲ具備スル者ハ受験スルコトヲ得ルモノト解スヘシ但シ其任用ニ至リテハ別ニ制限ナキヲ得ス

#### (乙) 學術上ノ要件

左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニアラサレハ受験スルコトヲ得ヌ

- 一 中學校ヲ卒業シタル者
- 二 専門學校令ニ基キ一般ノ専門學校入學ニ關シ試験檢定合格證書ヲ有シ又ハ無



試驗檢定ヲ受クル資格ヲ有スル者

三 中學校卒業以上ノ學力ヲ以テ入學程度トスル官立公立學校ニ入學シタル者又ハ其豫備科ヲ卒業シタル者

四 文官高等試驗委員ニ於テ普通教育ニ關シ中學校ト同等以上ト認ムル外國ノ學校ヲ卒業シタル者

### 第四章 受驗ノ準備

前ニ述ヘタル試驗規則ニ依リテ前述ノ試驗委員ノ施行スル文官高等試驗ニ應スルモノハ試驗規則ニ制限セラレタル資格ヲ有スヘキハ勿論且ツ其試驗ニ應スルノ實力ヲ涵養セサルヘカラス而シテ其實力即チ法律學ノ學理上ノ原則及ヒ現行法ニ通曉シ其學術ヲ實務ニ應用スルノ能力ヲ涵養スルノ方法ハ所謂獨學自修スル可ナリ又學校ニ入學シテ學修スル亦可ナリト雖モ由來法律學ハ範圍廣ク理論錯雜セルカ故ニ獨學能ク其法理ヲ解シ此試驗ニ及第スルモノハ拔群ノ秀才ニアラスンハ能ハサルナリ稀レニ其實例ナキニアラサルモ或ハ僥倖ニシテ及第セルモノモアルハ試驗制度其者ノ然ラシムル所ナル

ヲ以テ法理ニ通曉シ十全ヲ期セント欲セハ宜シク籍ヲ學校ニ置キ講堂ニ於テ親シク講義ヲ聽クニ如カス果シテ然ラハ如何ナル學校ニ入りテ修學ヲ爲スヘキ乎是レ以下ニ說述セントスル所ナリ而シテ其學校トシテ官立ノ帝國大學法科大學アリ數多ノ私立大學アリ然リ而シテ其教授ハ官私立略ホ共通ナリ然ラサルモ仍ホ其學力ニ於テ官立ノ教授ノ夫レト懸隔ナキ講師ヲシテ講義セシムルヲ以テ其內容實質ニ於テハ敢テ異ナルナシ然レトモ帝國大學法科大學卒業生ハ前ニ述ヘタルカ如ク豫備試驗免除ノ特典アルノミナラス其ノ試驗委員ノ殆ント大部分カ東京帝國大學法科大學教授中ヨリ任用セラルルハ今日ノ事實ニシテ法律學ノ廣汎ナル能ク全般ニ亘ルハ四ケ年ノ大學ノ講義ニテ盡ス所ニアラサルヨリ卒業試驗及ヒ文官試驗ノ問題タルヘキ箇所ハ講義ノ際ニ暗々ニ之ヲ察スルノ機ナシトセス故ニ學問ノ研鑽ヲ一生ノ事業トスルモノノ爲メニハ別論トシテ此試驗ニ應スル者ノ爲メニハ先ツ帝國大學法科大學ニ入りテ其講義ヲ聽クノ得策ナルハ更ニ辯スルヲ要セス文官試驗ニ合格シ青雲ニ乘セントスルノ青年ハ中學校卒業後ハ高等學校ヲ經テ東京帝國大學法科大學ニ籍ヲ置クヲ以テ便宜トス之レ理論ノ問題ニアラスシテ實際ノ現象ナリ



京都帝國大學法科大學創立アリテヨリ初メハ其文官高等試験ニ合格スル者ノ數曉天ノ星ノ如クナリシヨリ之ニ對スル世評モ囂然タリシカ爾來合格者ノ年々増加スルニ至リシハ學生ノ勉勵ニヨルヘシト雖モ或ハ情實ノ蟠ルニアラスヤトノ世評モナキニアラサルナリ此現象カ若シ果シテ前者ナランカ同大學ノ爲メ喜フヘキ現象ナリトス

文官高等試験ニ應セントスル者ハ帝國大學ニ入學シテ準備スルノ得策ナル前述ノ如シト雖モ事情茲ニ出ツル能ハサル者ハ私立大學ニ入り臥薪嘗膽ノ苦學ヲ爲シ以テ前述ノ特典者ニ倍スルノ實力ヲ養成セサルヘカラス果シテ然ラハ私立大學中何レノ學校ニ入ルヘキカ左ニ帝國大學及ヒ私立大學ノ組織内容及ヒ世評ノ梗概ヲ叙述シ以テ學修者ノ學校選擇ノ材料ニ供スヘシ

### 第一 東京帝國大學法科大學

一 位置 東京帝國大學法科大學ハ東京市本郷區元富士町加賀侯前田氏ノ藩邸ノ跡ニシテ前面ニハ古風ノ一大赤門ヲ有シ拾餘棟ノ宏壯ナル建築物ハ日本ノ最高學府タル威嚴ヲ示セリ

二 學制 法科大學ハ大別シテ之ヲ政治科、法律科、經濟科、商業科ノ四科トシ法

律科ヲ更ニ獨逸法、英吉利法、佛蘭西法ノ三科ニ別ツ現今日本ノ法律ハ多ク獨逸法ヲ承繼セルカ故ニ我國法律ノ濫奧ヲ究メント欲セハ獨逸法ヲ修ムルヲ便利ナリトス是レ該入學者カ他ニ比シテ多キ所以ナルヘシ而シテ其入學者ハ大學豫科ノ高等學校卒業生及ヒ之ト同等以上ノ學力アル者ニ限ル修業年限ハ各科トモ三年トス

### 第二 京都帝國大學法科大學

一 位置 京都市上京區吉田町ニ巍然トシテ聳立セル大厦高樓ハ之レ京都帝國大學ニシテ西ニ鴨川ノ清流アリ北ニ四明ノ靈峯ヲ控ヘテ山紫水明ノ位置ヲ占領セリ

二 學制 法律學科及ヒ政治經濟學科ノ二科ニ別テ法律學科ニ於テハ英法、佛法、獨法ノ各兼修別アルコト東京帝國大學ト異ナル所ナク又修學年限モ各科共ニ三年トス

### 第三 私立大學

私立ノ專門學校ニシテ法律政治ニ關スル學科ヲ教授スル學校ハ早稻田大學、慶應義塾、明治大學、中央大學、日本大學、法政大學、專修大學、立命館大學(舊京都法政大學)關西大學ノ九校ニシテ其科程ヲ別チテ專門部、大學部、高等豫科又ハ大學豫科トシ其



卒業年限専門部大學部ハ各三ヶ年高等豫科又ハ大學豫科ハ一年若クハ一年半ナリ而シテ其高等豫科ハ大學部ニ入ルノ階梯ニシテ専門部ハ正科特科若クハ本科別科アリテ正科ハ専門學校令ニ依ルモノトス而シテ其學科目ハ各校大同小異ニシテ講師モ亦多ク共通ナリ然ラサルモ其講師ノ學力ニハ軒輊ナキモノノ如シト雖モ各校ニハ各々其特長アリ從テ其卒業生ノ狀況モ格段ノ差異アリ今其一般ヲ叙スレハ左ノ如シ

(甲) 早稻田大學

其設立者カ大隈侯ナルヨリ本校ハ政黨ノ爲メニ建テラレ其子分ヲ養成スル所ナリト臆斷スル者アリシカ事實ハ必スシモ然ラスト雖モ元來本校ハ政治科ヲ本位トシ法律科ハ餘リ振ハサルノ觀アリ從テ其卒業生ノ世ニ頭角ヲ表ハセルハ新聞記者ニ非サレハ政治家ニシテ法律家ノ如キハ寥寥々晨星ノ如シト曰フモ過言ニアラサルナリ

(乙) 慶應義塾大學

理財科ヲ中心トス隨テ卒業生ノ狀況モ實業社會ニ知名ノ士多シト雖モ法律家ニハ知名ノ士甚タ少ナシ

(丙) 明治大學

法律科ヲ中心トシ其ノ學生モ多數ナルヨリ辯護士、判事檢事、文官高等試験ニモ好成绩ヲ示シ殊ニ司法官ノ多數ヲ輩出シタル點ニ於テ他ニ其比類ヲ見ス年ヲ逐フテ盛大ヲ加ヘツツアリ

(丁) 中央大學

文官高等試験及ヒ司法官試験ニ於ケル成績ハ頗ル良好ノ地位ヲ占メ學生ハ明治大學ニ比シテ多カラサルモ講師及ヒ理事ニ熱心ノ人多キカ故ニ學生モ眞面目ニ勉強スル者多シトノ評高シ普通晝間教授ノ外夜學部ヲ併設ス

(戊) 日本大學

授業時間夜間ナルカ故ニ職務片手ノ者モ入學シテ聽講スルヲ得ヘク且ツ本校ハ他校ノ如ク學年別ナキヲ以テ學生ハ自己ノ卒業ニ至ルマテ學修スヘキ科目ヲ選擇シテ聽講スルヲ得ヘク試験モ毎年三回執行セラルルノ結果科目ノ幾部宛選擇シテ受験シ得ルナリ從テ卒業期モ其精力勉勵ニ由リテ必スシモ三ヶ年ヲ要セサルナリ

(己) 法政大學

梅、富井兩博士等ノ經營ニ創マリ其歴史モ古ク授業ハ夜間ニシテ卒業生モ各種ノ方



面ニ好成绩ヲ表ハシ居レリ

(庚) 専修大學

本校ニハ經濟科ノ外法律科ノ設ケアルモ法律科ハ當分募集セサルナリ

(辛) 立命館大學(舊京都法政大學)

多ク京都帝國大學教授諸氏之カ教授ヲ擔任シ文官試驗司法官辯護士試驗志望者ニ適應セシムル趣旨ニシテ創立以來日尙ホ淺シト雖モ其卒業生ノ各種試驗ニ應スル者ハ年々好成绩ヲ見ハシ居レリ

(壬) 關西大學

大阪ニ在リ創立最モ古ク各種試驗ニ合格シタル者モ亦少シトセス講師ハ京都帝國大學法科大學教授諸氏及ヒ大阪法衙ノ司法官諸氏之ニ當ル

受験科目ヲ準備スル學校ノ組織内容特色ハ上述ノ如シト雖モ學問ノ修得ハ各自ノ刻苦精勵ニ俟タサルヘカラス法律學ノ如キ範圍廣ク學說多樣ニ岐ルル學問ハ講義ノ筆記ヲ丸呑ミニシテ教科書ノ文句ヲ諳記セントスルモアレト之レ徒ラニ精神ヲ勞シテ其效尠シ故ニ一ノ事項モ上下四方各方面ヨリ觀察シテ理解スルノ工夫ヲ爲スヘキハ勿論同志

ト共ニ討究シテ以テ深ク腦裡ニ刻セサルヘカラス此覺悟アリテ熱心ニ眞面目ニ學修シテ怠ラスンハ智識ハ明瞭正確トナリ自ラ學問ニ趣味ヲ覺ユルニ至ルノミナラス頭腦モ亦系統的トナリ試験ノ合格ヲ期スヘキナリ

## 第五章 試験手續及受験上ノ用意

### 第一 試験ノ科目及其目的

試験ヲ別チテ豫備試験及ヒ本試験トシ豫備試験ニ合格シタル者ニアラサレハ本試験ヲ受クルヲ得サルモノトセリ而シテ豫備試験ノ目的ハ本試験ヲ受クルニ相當ナル學識ヲ有スルヤ否ヤヲ考試スルモノニシテ本試験ハ受験人學理上ノ原則及ヒ現行法令ニ通曉シ竝ニ其修得シタル學術ヲ實務ニ應用スルノ能力アリヤ否ヤヲ考查スルニ在リ而シテ豫備試験ハ論文試験及ヒ外國語試験トシ論文試験ハ法律經濟ニ關スル問題數個中其一問ヲ選擇セシメ外國語ハ英語、獨語、佛語ノ中ニ就キ豫メ一種ヲ選擇セシメテ之ヲ試験スルモノトス然レトモ帝國大學法科大學、舊法科大學部、文學部、司法省法學校正則部ノ卒業證書ヲ有スル者及ヒ學習院大學科四學年ノ科程ヲ卒業シタル者ニハ豫備試



験ヲ免除セリ

本試験ノ科目ハ憲法、刑法、民法、行政法、經濟學、國際法ノ六科目ノ外ニ財政學、商法、刑事訴訟法、民事訴訟法ノ四科目アリ後ノ四者ニ付キテハ受験者ヲシテ豫メ一科目ヲ選擇セシメテ之ヲ試験ス

本試験ヲ別チテ筆記試験及ヒ口述試験トシ前者ニ合格シタル者ニアラサレハ後ノ試験ニ應スルヲ得サルナリ如斯ニシテ口述試験マテ合格シタル者ハ文官試験合格者トシテ官報ヲ以テ公布セラレ且ツ合格證書ヲ付與セラルルナリ

第二 受験ノ手續

文官高等試験規則及ヒ其細則ヲ一見スレハ自ラ明カナルヘキヲ以テ之ヲ省略スヘシ

第三 試験ノ執行

試験ハ毎年一回東京ニ於テ文官高等試験委員之ヲ施行シ大抵六月下旬若クハ七月上旬マテニ願書ヲ提出セシメ其豫備試験並ニ本試験ノ期日等總テ官報ニテ公告セラルルナリ

豫備試験ニ合格シタル者ハ前述ノ豫備試験ヲ免除セラレタル受験者ト共ニ委員長ノ通

知ニ依ル期日及ヒ場所ニ於テ本試験ノ筆記試験ヲ受クルモノトス筆記試験論文試験外國語試験ハ受験人總員ヲ一室又ハ數室ニ入レ豫テ唐紙ニ大書シテ卷上ケタル問題ヲ下シテ試験委員監視ノ下ニ之ヲ行フ而シテ其試験ノ答案ハ總テ番號ヲ以テ姓名ニ代ヘ提出ス受験者試験場ニ入ルトキハ先ツ心ヲ靜平ニシテ問題ノ意味ヲ熟考シ委員ノ問ハント欲スル所ノ果シテ那邊ニ在ルヤヲ察知シテ後徐ロニ筆ヲ染ムルヲ要ス答案ノ記述ノ繁閑何レヲ可トスルヤハ一概ニ論スルヲ得スト雖トモ唯其字劃ノ明瞭ニシテ記述ノ的確ヲ期スルハ筆答ノ第一義タリ繁雜ナル記述ハ必ス多クノ缺點ヲ伴フノ弊ナシトセス又答案ヲ書キ終リタルトキハ必ス再三反讀スルコトヲ忘ルヘカラス草卒ノ間一二ノ脱字ハ免レ難キ所而モ之カ爲ニ答案ノ價值ヲ損スルコト多シ戒心ヲ要ス

筆記試験ニ合格シタル者ハ官報ヲ以テ公告セラレ同時ニ口述試験ノ期日呼出狀ヲ發セラル口述試験ハ筆記試験ト異ナリ委員ノ發問ニ對シ直ニ答辯スルモノナルヲ以テ心氣ヲ平靜ニシ理解ノ敏速ヲ期スヘシ唯功ヲ急イテ不用意ノ應答ヲ爲ストキハ自ラ迷路ニ入ルノ悔ナシトセス又假リニ自說カ委員ノ論破スル所ト爲リタリトスルモ是レ口述試験ハ學力ヲ試ムルヲ目的トスルモノナレハ決シテ落膽失望スヘカラス



尙ホ受験者ニ於テ常ニ起ルヘキ疑問ハ試験委員ヨリ自説ヲ攻撃セラレ遂ニ窮迫シタルトキハ其主張ヲ取消シテ試験委員ノ説ニ從フヘキカ或ハ窮迫スルモ仍ホ自説ヲ固持スヘキヤニ在リ何レカ是ニシテ何レカ非ナルカ遽ニ概論スヘキニ非スシテ唯場合ト委員ノ人格トニ鑑ミ應變ノ判斷ヲ爲スノ外ナカルヘシ

試験了レハ試験委員會ヲ開キテ合格者ヲ決定シ之ヲ委員長ニ報告シ委員長ハ其氏名ヲ官報ヲ以テ公告シ仍ホ各本人ニ通知シ不合格者ニハ文官高等試験事務所ヨリ其旨ノ通知ヲ爲スヲ例トス

#### 第四 文官高等試験委員

(一) 組織 文官高等試験委員ハ委員長常任委員及ヒ臨時委員ヲ以テ組織ス各官廳高等官中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命スト規定セリ而シテ其委員長ハ法制局長官ヲ以テ之ニ充テ常任委員臨時委員ノ多クハ兩京帝國大學法科大學ノ教授之ニ任命セラレ他ノ學校及ヒ官廳ヨリ一二人ヲ出スニ過キサルヲ今日ノ狀況ナリトス  
文官試験委員ノ事務ニ關シテ常任及ヒ臨時ノ書記ヲ置キ常任書記ハ内閣所屬又ハ法制局判任官ヨリ、臨時書記ハ各官廳吏員ノ中又ハ其他ヨリ之ヲ命スルモノトス

(二) 事務 文官高等試験委員ハ文官試験及ヒ委任文官任用ノ詮衡ニ關スル事務並ニ文官普通試験科目ニ關スル事務、豫備試験ニ於テ受験者カ本試験ヲ受クルニ相當ナル學識ヲ有スルヤ否ヤ及ヒ本試験ニ於テ受験者カ學理上ノ原則及ヒ現行法令ニ通曉シ並ニ其修得シタル學術ヲ實地ニ應用スルノ能力アリヤ否ヤヲ各自擔任ノ學科ニ就キテ考查報告ヲ爲シタル上合格者ヲ定ムル委員會ニ列席議定スルノ權限ヲ有シ且ツ試験ノ監督ヲ爲スニ在リ

(三) 監督 文官試験委員長ハ委員會ノ議長ト爲リテ之ヲ指揮監督シ内閣總理大臣ハ第二次ノ最高監督者トシテ更ニ之ヲ指揮監督ス

### 第六章 合格者ノ就職

高等文官ノ採用ニハ上述ノ如ク任用令ノ定ムル所ニ依リテ特定ノ資格ヲ要シ始メテ奏任官タルニハ特別任用ノ文官ヲ除キテハ必ラス文官高等試験ノ合格者タラサルヘカヲサルヲ以テ合格者ニ非サレハ之ヲ採用スルコトヲ得スト雖モ是レ其任用ノ條件タル資格ニシテ之レカ爲メニ何等權利ノ發生スルコトナシ從テ就職セント欲スル者ハ更ニ自



己ノ希望スル官廳ノ當局者ニ知己ヲ求メテ各々就職ノ方法ヲ講セサルヘカラス而シテ其始メハ屬官トシテ事務ノ修習ヲ爲シ早キモ一ケ年遅クハ二三ケ年位ノ内ニ高等文官トシテ採用セラルルニ至ルヘシ爾後ハ各自ノ手腕ニ依リテ榮達ノ途ヲ求ムヘク所謂官海游泳ノ術ノ如キ亦一面捨ツヘカラサル眞理アリト雖モ徒ラニ阿附ヲ事トシテ其能ヲ養フコトヲ忘ルルトキハ縦令一時ノ利ヲ博フルコトアリトモ終ニ生涯ヲ誤マルノ悔ナシトセス

## 第七章 關係法規

### ◎文官任用令

- 第一條 文官ノ任用ハ親任式ヲ以テ任スル官及特別ノ規程ヲ設クルモノヲ除クノ外本令ノ定ムル所ニ依ル
- 第二條 勅任文官ハ第五條第一項ノ資格ヲ有シ一年以上勅任文官ノ職ニ在リタル者又ハ奏任文官トシテ二年以上高等官三等ノ職ニ在リタル者ヨリ之ヲ任用ス
- 第三條 第五條第一項ノ資格ヲ有セス二年以上勅任文官ノ職ニ在リタル者又ハ奏任文官トシテ二年以上高等官三等ノ職ニ在リタル者ハ文官高等試験委員ノ詮衡ヲ經テ勅任文官ニ任用スルコトヲ得但シ大正二年勅令第百六十二號第一條ニ掲クル文官ノ職ニ在リタル者ハ此ノ限ニ在ラス
- 第四條 陸海軍將官ハ各其ノ部内ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得
- 第五條 奏任文官ハ左ノ資格ノ一ヲ有スル者ヨリ之ヲ任用ス
- 一 文官高等試験ニ合格シタル者



- 二 外交官及領事官試験ニ合格シ二年以上外交官又ハ領事官ノ職ニ在リタル者
- 三 二年以上判事又ハ検事ノ職ニ在リタル者

二年以上奏任教官ノ職ニ在リタル者ハ之ヲ文部部内ノ奏任文官ニ任用スルコトヲ得

第六條 判任文官ハ左ノ資格ノ一ヲ有スル者ヨリ之ヲ任用ス

- 一 中學校又ハ文部大臣ニ於テ之ト同等以上ト認定シタル學校ヲ卒業シタル者
- 二 一般ノ專門學校入學ニ關スル試験檢定ニ合格シタル者
- 三 專門學校令ニ依リ法律學、政治學、行政學又ハ經濟學ヲ教授スル學校ニ於テ三年ノ課程ヲ履修シ其ノ學校ヲ卒業シタル者
- 四 文官普通試験ニ合格シタル者
- 五 文官高等試験ニ合格シタル者
- 六 三年以上文官ノ職ニ在リタル者
- 七 五年以上雇員タル者

第七條 教官、技術官其ノ他特別ノ學術技藝ヲ要スル文官ハ高等官ニ在リテハ文官高等試験委員、判任官ニ在リテハ文官普通試験委員ノ詮衡ヲ經テ之ヲ任用ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

従前規定ニ依リ文官タル資格ヲ有スル者ハ仍其ノ規定ニ依リ之ヲ任用スルコトヲ得

◎文官試験規則

第一章 總 則

第一條 文官試験ハ別ニ規程ヲ設クルモノノ外本令ニ依リ之ヲ行フ

第二條 文官試験ヲ分チテ文官高等試験及普通試験ノ二種トス

第三條 文官試験ヲ行フヘキ期日及場所ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告シ東京以外ノ地ニ於テ行フ試験ニ在リテハ仍ホ其ノ地方ノ新聞紙一種以上ニ公告スヘシ

第四條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ文官試験ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者
- 二 破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限リノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者



第五條 文官試験ヲ受ケテ合格シタル者ニハ合格證書ヲ付與ス

第六條 不正ノ方法ニ因リ試験ヲ受ケント企テタル者及試験ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ其期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス試験合格證書ヲ受領シタル後は等ノ事實發覺シタルトキハ其合格證書ヲ無効トス

第七條 文官試験ヲ出願スル者ニハ手数料トシテ高等試験ニ在リテハ金十圓、普通試験ニ在リテハ金二圓ヲ納メシム

第二章 文官高等試験

第八條 文官高等試験ハ毎年一回東京ニ於テ文官高等試験委員之ヲ行フ

第八條ノ二 左ノ各種ノ一ニ該當スル者ニ非サレハ文官高等試験ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 中學校ヲ卒業シタル者
- 二 専門學校令ニ基キ一般専門學校入學ニ關シ試験檢定證書ヲ有シ又ハ無試験檢定ヲ受クル資格ヲ有スル者
- 三 中學校卒業以上ノ學力ヲ以テ入學程度トスル官立學校ニ入學シタル者又ハ其豫備科ヲ卒業シタル者

四 文官高等試験委員ニ於テ普通教育ニ關シ中學校ト同等以上ト認ムル外國ノ學校ヲ卒業シタル者

第九條 文官高等試験ヲ分チテ豫備試験及本試験トス豫備試験ニ合格シタル者ニアラサレハ本試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十條 豫備試験ハ受験人本試験ヲ受クルニ相當ナル學識ヲ有スル者ト認ムヘキヤ否ヲ考試スルヲ目的トス

第十一條 豫備試験ハ論文及外國語ニ付之ヲ行フ

論文試験ハ法律經濟ニ關スル文題ヲ課シ之ヲ行ヒ外國語試験ハ英語、佛語及獨語ノ中ニ就キ豫メ一種ヲ選擇セシメ之ヲ行フ

第十二條 帝國大學法科大學、舊東京大學法學部、文學部及舊司法省法學校正則部ノ

卒業證書ヲ有スル者及學習院大學科四學年ノ課程ヲ卒業シタル者ハ豫備試験ヲ免ス

第十三條 本試験ハ受験人學理上ノ原則及現行法令ニ通曉シ竝ニ其修得シタル學術ヲ實務ニ應用スルノ能力アリヤ否ヤヲ考試スルヲ目的トス

第十四條 本試験ハ左ノ科目ヲ用キテ之ヲ行フ



一、憲法 二、刑法 三、民法 四、行政法 五、經濟學 六、國際法  
以上ノ科目ハ試験ノ際選擇取捨スルコトヲ得ス

一、財政學 二、商法 三、刑事訴訟法 四、民事訴訟法

以上ノ科目ハ受験者ヲシテ其ノ中ニ就キ豫メ一科目ヲ選擇セシメ之ヲ試験ス

第十五條 本試験ハ分テ筆記試験又口述試験トス筆記試験ニ合格シタル者ニアラサレハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 豫備試験及本試験ノ合格者ヲ定ムル方法ハ試験委員ノ議定スル所ニ依ル

第十七條 文官高等試験ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

### 第三章 文官普通試験

第十八條 文官普通試験ハ各官廳ノ須要ニ應シ其ノ應ノ文官普通試験委員之ヲ行フ

第十九條 文官普通試験ノ科目ハ尋常中學校ノ科程ヲ標準トシ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ文官普通試験委員之ヲ定メ文官高等試験委員ノ承認ヲ經ヘシ

第二十條 文官普通試験ニ關スル細則ハ文官普通試験委員之ヲ定メ文官高等試験委員ニ報告スヘシ

### 附 則

第二十一條 本令ハ明治二十七年一月一日ヨリ施行ス

參 照

●附則(明治三十八年七月勅令第百九十一號)

第八條ノ二及第十條ノ規定ハ明治四十二年以後、第十一條ノ規定ハ明治三十九年以後施行スヘキ文官高等試験ニ之ヲ適用ス

### ◎文官高等試験細則

第一條 文官高等試験ヲ受ケムトスル者ハ試験願書ニ履歷書ヲ添ヘ公告シタル期日迄ニ文官高等試験委員長ニ差出スヘシ

文官試験規則第十二條ニ該當セサル者ニ在リテハ仍文官試験規則第八條ノ二ニ掲クル資格ヲ證明スルニ足ルヘキ書類ヲ添付スヘシ

第二條 (削除)



第三條 試験手数料ハ收入印紙ヲ用キ試験願書ニ貼付スヘシ但試験ヲ受ケサルコトアルモ之ヲ還付セス

第四條 試験願書及證書又ハ證明書ヲ除クノ外添付書類ハ出願ノ取消ヲ求ムルモ之ヲ還付セス

第五條 豫備試験並ニ本試験ノ筆記試験及口述試験期日ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第六條 本試験ノ筆記試験ハ二日前ニ其ノ科目及期日ヲ定メテ之ヲ行ヒ其ノ口述試験ハ筆記試験全ク終リタル後更ニ期日ヲ定メテ之ヲ行フ

第七條 筆答ヲ以テ試験スヘキ場合ニ於テハ受験人總員ヲ一室又ハ數室ニ入レ問題ヲ付シ文官高等試験委員二人以上監視ス

第八條 口答ヲ以テ試験スヘキ場合ニ於テハ文官高等試験委員二人以上列席シテ受験人一人毎ニ試問シ即時答辨ヲ爲サシム

第九條 受験人ハ試験室内ニ於テ互ニ語話シ又ハ喧騒スルコトヲ得ス

第十條 受験人ハ「特ニ指定セルモノヲ除クノ外」書類其ノ他受験ノ材料トナルヘキモノヲ携帯シテ試験室内ニ入ルコトヲ得ス

第十一條 受験人ハ問題ニ付質問シ又ハ試験場ニ於テ書籍ノ借覽ヲ求ムルコトヲ得ス

第十二條 受験人ハ文官高等試験委員ノ揭示其ノ他試験委員ノ命令ヲ遵守スヘシ

第十三條 受験人試験期日ニ出席セス又ハ試験半途ニ退室シタルトキハ其ノ期ノ試験ヲ受タルコトヲ得ス

第十四條 文官高等試験委員長ハ文官高等試験委員會議表決ノ數ニ入ラス但可否同數ナルトキハ文官高等試験委員長之ヲ決ス

第十五條 文官高等試験委員試験ノ成績ヲ査定シタルトキハ之ヲ文官高等試験委員長ニ報告スヘシ其ノ報告期限ハ文官高等試験委員長豫メ之ヲ定ム

第十六條 文官高等試験合格者ノ氏名ハ官報ヲ以テ公告ス

第十七條 文官高等試験ニ關シ必要ナル手續ハ文官高等試験委員長之ヲ定ム

參照

●附則（明治三十八年七月閣令第一號）

本令中文官試験規則第八條ノ二ニ關スル事項ニ付テハ明治四十二年以後、其他ニ付テ



ハ明治三十九年以後施行スヘキ文官高等試験ニ之ヲ適用ス

◎文官高等試験委員官制

- 第一條 文官高等試験委員ハ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ文官高等試験及奏任文官任用ノ詮衡ニ關スル事務並文官普通試験科目ニ關スル事務ヲ管掌ス
- 第二條 文官高等試験委員ハ委員長常任委員及臨時委員ヲ以テ組織シ各官廳高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス
- 第三條 文官高等試験委員長ハ委員ヲ監督シ其ノ一切ノ事務ヲ統理ス
- 第四條 文官高等試験常任委員ハ三人ヲ以テ定員トス委員長ノ監督ヲ承ケテ文官高等試験及奏任文官任用ノ詮衡ニ關スル事務并ニ文官普通試験科目ニ關スル事ヲ掌ル
- 第五條 文官高等試験臨時委員ハ文官高等試験施行ノ際之ヲ命ス委員長ノ監督ヲ承ケ文官高等試験ノ事ヲ掌ル
- 第六條 文官高等試験委員ノ事務ニ關シ常任書記及臨時書記ヲ置ク
- 第七條 常任書記ハ内閣所屬又ハ法制局判任官臨時書記ハ各官廳ニ奉職スル吏員ノ中

又ハ其ノ他ヨリ之ヲ命ス書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第八條 常任書記ハ三人ヲ以テ定員トス臨時書記ハ文官高等試験施行ノ際必要ニ應シ之ヲ命ス



## 第二編 外交官及領事官試験

### 第一章 外交官ノ意義及種類

外交官ナル語ニ廣狹ノ二義アリ廣義ニ所謂外交官ニハ種多ノモノヲ包含ス先ツ之ヲ大別シテ高等官及判任官ノ二種ト爲スコトヲ得左ニ之ヲ分説スヘシ

#### 第一 高等外交官

高等外交官ハ更ニ之ヲ内國勤務者及海外勤務者ノ二種ニ細別スルコトヲ得

#### (甲) 内國勤務ノ高等外交官

内國勤務ノ高等外交官ハ即チ外務省高等官ニシテ外務大臣ヲ始メ次官、局長、參事官及書記官ノ五者ナリ

此種ノ官吏中大臣ハ姑ク措キ其他ノ者ニ任用セラルルニハ法令上文官高等試験合格者タルヲ以テ足り敢テ外交官及領事官試験合格者タルコトヲ必要トスルモノニ非ス然レトモ實際ニ於テハ海外勤務ノ高等官ヨリ轉官セシムルヲ通例トシ文官高等試験合格者ヨリ任用セラレシハ從來僅カニ二三子ニ過キス

#### (乙) 海外勤務ノ高等外交官

海外勤務ノ高等外交官ハ即チ狹義ノ外交官及領事官ノ二者ナリ

#### A 狹義ノ外交官

狹義ノ外交官ニハ左ノ六種アリ

- 1 特命全權大使
- 2 特命全權公使
- 3 大使館參事官
- 4 辦理公使
- 5 大使館及公使館書記官
- 6 外交官補

#### B 領事官

領事官ニハ左ノ四種アリ

- 1 總領事
- 2 領事



3 副領事

4 領事官補

右ノ外仍ホ貿易事務官及名譽領事ナルモノアリ貿易事務官ハ領事ノ駐在スヘキ土地ニ於テ其國ノ政府カ領事ノ駐在ヲ許サルルトキ之ニ代ヘテ任命セラルル官吏ニシテ之ヲ實例ニ徵スルニ我國ニ於テハ嘗テ浦鹽斯德ニ一名ヲ駐在セシメタルコトアリシモ日露戰役後ハ此地ニモ領事ノ駐在ヲ許スニ至リシカハ現今ニ於テハ事實上全ク貿易事務官ナルモノヲ存セス

又領事ノ駐在スヘキ土地ニ在留セル本國人僅少ナルカ爲メ未タ其事務専門ノ領事ヲ置クニ足ラサル場合ニ於テハ其地ノ信用スヘキ商人ヲ選拔シ之ニ領事ノ職務ヲ依囑スルコトアリ之ヲ名譽領事ト稱ス故ニ名譽領事ハ囑託國ノ官吏ニ非ス我國ニ在リテモ斯卡ル場合ニ於テハ普通其地ニ於テ名望アル外國人ヲ之ニ充ツルノ慣例ナリ

狹義ノ外交官及領事官海外勤務ノ高等外交官ニ任用セラルルニハ外交官及領事官試験ニ合格シタル者又ハ外務省高等官ニシテ在職滿一年以上ノ者タルコトヲ要ス

ルノ制規ナリ然レトモ實際外務省高等官ヨリ任用セラルルコトハ甚タ稀ニシテ多クハ試験合格者ヨリ登用セラルルカ如シ如此狹義ノ外交官及領事官タルニハ一定ノ制限アリト雖モ外務書記生ニシテ滿五年以上在外公館ニ勤務シ三級以上ノ俸給ヲ受クル者ハ例外トシテ副領事ニ特別任用ノ途ヲ存セリ

此外通譯官ナルモノアリト雖モ其性質普通ノ外交官ト異ナルヲ以テ任用上其資格ニ制限ナシ然レトモ多クハ外務省留學生卒業者ヨリ採用セラルル實例ナリ

第二 判任外交官

判任外交官ニモ亦内國勤務者ト海外勤務者トノ二種アリ

(甲) 内國勤務ノ判任外交官

内國勤務ノ判任外交官ハ即チ外務屬ナリ外務省ニ在リテ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス其任用ハ普通文官任用令ニ從フ

(乙) 海外勤務ノ判任外交官

海外勤務ノ判任外交官ハ即チ外務書記生ナリ大使館、公使館、領事館及貿易事務館ニ在リテ外務屬ニ準スヘキ諸般ノ事務ニ従事ス



外務書記生ニ任用セラルルニハ原則トシテ外務書記生試験ニ合格スルコトヲ要ス然レトモ外務通譯生ニシテ滿二年以上在外公館ニ勤務シタル者ニ對シテハ特別任用ノ途アリ

前ニモ一言シタル如ク滿五年以上外務書記生ヲ奉職シタル者ハ副領事ニ任用セラルルコトヲ得ヘク又副領事ニ任用セラレタル上ハ累進シテ遂ニ總領事ニ達スルコトヲ得ルカ故ニ他省ノ屬官ノ如ク如何ニ才能ヲ貯フルモ高等官ニ陞叙セラルルノ途稀ニシテ畢生判任官ニ安ムセサルヘカラサルモノトハ其趣ヲ異ニセリ

## 第二章 外交官トシテノ適格

如何ナル人カ外交官ト爲ルニ適スヘキヤ此點ニ付キ世人ノ多クハ大ナル誤見ヲ有スルモノノ如シ世人動モスレハ輒チ曰ヘラク外交官ハ堂々タル風姿ト閑雅ナル動靜トヲ具備セサルヘカラス換言スレハ外交官タルニハ社交的素質(Social character)ヲ有スルコト絶對的ニ必要ナリト然レトモ余輩ヲ以テ之ヲ見ルニ是レ交際官ト外交官トヲ混同シタルモノナリ抑々交際官ハ所謂 Agreeable Mission ヲ有スルモノニシテ例ヘハ外國

君主ニ親書ヲ捧呈スルカ爲ニ派遣セラレ或ハ外來貴賓ヲ饗應スルカ如キコトヲ其本務ト爲スモノナリ夫ノ宮内省式部官ノ如キハ即チ其適例ナリトス之ニ反シテ外交官ハ主トシテ Disagreeable Mission ヲ有スルモノニシテ交際官ノ如ク外國ニ快感ヲ與フルコトヲ目的トスルモノニアラス其職務ハ外國ニ對シテ自國ノ利益ヲ主張スルニ在リ故ニ性質上寧ロ却テ不快感ヲ與フルモノナリト謂フヘシ然ルニ國家外交ノ初期ニ在リテハ此二者ノ使命ハ往往ニシテ混同セラルルヲ免カレサリシト雖モ外交ノ發達セル今日ニ迨ヒテハ復タ寸疑ヲ挿ムノ餘地ナキニ至レリ翻ツテ我國既往ノ外交ニ顧ミルニ明治政府ノ初代ニ於テハ前述ノ二者ハ全ク區別セラレヌ駐外使臣ヲ採用スルニ當リテモ其才能ノ適否ハ措イテ之ヲ問フコトナク一ニ大名華族中ヨリ之ヲ拔擢シテ派遣セラルルノ方針ナリシカト炯眼陸奧伯出テテ外務大臣ト爲ルヤ帝國外交ノ萎靡振ハサルノ原因一ニ茲ニ萌スコトヲ看破シ遂ニ一大鐵槌ヲ下シテ之カ改革ヲ斷行シ原則トシテ外交官試験ノ合格者ナラサルヘカラサルコトヲ定メ以テ其弊根ヲ一掃セリ

思フニ外交官ニ必要ナル素質ハ社交的才能ヨリモ寧ロ他ニ種多ノ重ムスヘキモノアリ曰ク冷靜ナリ曰ク機敏ナリ曰ク果斷ナリ此等ノ三者ハ何人モ其緊要ナルヲ信シテ疑ハ



サルヘシ而カモ余輩ノ信スル所ニ依レハ仍ホ之ニ加フルニ國際的生活ニ深キ趣味ヲ有スル者ヲ以テ最モ適材ナリトセム殊ニ注意スヘキハ人ノ知ル如ク我國土ハ世界其比ヲ見サル天與ノ樂天地ナリト雖モ外交官ノ活動スヘキ舞臺ハ世界ナリ南洋ノ蠻雨北洋ノ氷雪敢テ意トスルコトヲ得ス歐ニ亞ニ將タ米ニ其使命ノマニマニ進退シ骨ヲ天涯ノ異域ニ埋ムルノ決心ナカルヘカラサルナリ茲ニ於テカ外交官タル者ハ其身體特ニ剛健ナルコトヲ必要トス

國際交通ノ頻繁ナル今日ニ於テハ世界ハ恰モ一家ノ如シト言フモ過言ニアラス從テ國家ノ對外關係ハ延イテ國內政策ヲモ動カスニ至レリ茲ニ於テカ國際關係ニ通スル者ハ自ラ國家爲政ノ首班ニ立タサルヘカラサルノ勢ヲ馴致セルカ如シ蓋シ斯カル現象ハ我國ノ既往ニ於ケル如ク對外關係ノ幼稚ナリシ時代ニ於テハ之ヲ明認スルコト能ハサリシト雖モ歐洲諸國ノ如ク國家ノ隆替興廢ハ多ク列國ノ合縱連衡ニ依リテ決セラルルモノニ在リテハ夙ニ十七世紀ノ頃ヨリ明ニ之ヲ認識スルヲ得タリキ見ヨ夫ノ米國ノ總理大臣ノ前身ハ多クハ外務大臣タリシコトヲ此一例當ニ之ヲ證シテ餘アリト謂フヘシ之ヲ要スルニ國家政治ノ首腦ハ外交ニ在リ從テ國家カ第一流ノ人物ヲ要スルモ亦外交

ノ方面ニ在リト謂ハサルヘカラス茲ニ於テカ余輩ハ外交官志望者ニ對シテ自重奮勵セムコトヲ望マサルヲ得サルナリ

### 第三章 受験ノ準備

外交官及ヒ領事官試験ニ在リテモ大體一般ノ文官高等試験ニ於ケル説明ヲ援用シ得ヘシト雖モ仍ホ特別ノ記述ヲ要スルモノアリ

抑々海外勤務ノ高等外交官タルニハ例外トシテ特別任用ニ依ルノ外ハ必ス外交官及領事官試験ヲ受ケサルヘカラス而シテ此試験ハ他ノ文官試験等ニ比シ種々異ナリタル特色ヲ有ス從テ之カ受験志望者ハ先ツ如何ナル學校ニ入學スルヲ最モ適當ナリトスルカニ付キ疑問ヲ起スナルヘシ今之ヲ本試験合格者ノ出身別ニ依リテ見ルニ尙ホ大多數ヲ占ムルモノハ東京帝國大學出身者ニシテ且ツ其成績順ニ於テモ年々東京帝國大學出身者カ高位ニ在ルノ實例タリ然ラハ東京帝國大學ハ志望者ニ取り最モ有利ナルカ如ク見ユルモ強チ然リト云フコトヲ得スシテ各一長一短一利一害アルヲ免レス即チ大學出身者ハ一般ニ語學ノ力ニ乏シク且ツ法科出身者ハ經濟學ノ素養ニ缺クル所アルモノノ



如シ是レ學校選擇ニ際シ特ニ注意セサルヘカラサル點ナリ  
 高等商業學校ハ一時外交官試験ニ盛名ヲ逞フセシモ近時ハ一步ヲ帝大ニ輸スルカ如シ  
 抑々高等商業ハ中學卒業後六箇年ニシテ專攻部領事科ヲ修了スルコトヲ得ルカ故ニ大  
 學ニ比シ一年ヲ利スルノ勘定ナリト雖モ其缺點トシテハ法律學ニ於テ統一の智識ヲ缺  
 グノ憾アリ從テ英語經濟ノ二科ニ於テハ帝大ノ卒業生ヲ凌駕スルニ足ルモ法學ニ於テ  
 一步ヲ輸スルヲ免カレサルナリ聞クカ如クムハ京都大學出身者モ法律學ニ於テハ東京  
 大學ノ出身者ニ劣レル所アリト精勵一番スヘキ點ナルヘシ  
 次ニ私立大學ニ付キテ云ハンニ從來私立大學出身ノ外交官受験者ハ殆ト早稻田大學及  
 ヒ慶應義塾ニ限ラレタルノ有様ナリキ而シテ私立出身ノ受験者ト雖モ苟モ外交官タル  
 ニ適材ナリト信スル人ナラムニハ試験委員モ之ヲ歡迎セサルノ理ナシ然レトモ彼等ハ  
 事實上受験ニ困難ヲ覺ユルカ如キヲ奈何セム是レ大ニ努力セサルヘカラサル點ナリト  
 ス

最後ニ外國大學出身者ハ本試験ニ向ツテ寧ロ不利益ナル地位ニ在ルコトヲ警告セムト  
 欲ス蓋シ彼等ハ語學ハ其最モ長所トスル所ナリト雖モ現今外交官試験ノ方針ハ語學ヲ  
 以テ最重要目トスルモノニアラス外交官ハ通譯官ニアラサレハナリ思フニ本試験ニ依  
 リ外務省ノ要求スル所ハ人物ニ於テ將テ學識ニ於テノ第一流者タルヘシ若シ外國大學  
 出身者ニシテ人物學識共ニ委拔優等ナリトセハ其長所タル語學ハ所謂鬼ニ金棒タルヘ  
 ク外交官試験ヲ受クルニ最適材タルヤ言フ迄モナシ然レトモ受験者ニ取り必要ナルハ  
 金棒タラムヨリモ寧ロ鬼タルニ在リ故ニ外國大學出身者ハ受験ニ先タチ日本ノ法蘭經  
 濟ノ狀態ニ付キ深ク研究シ以テ大ニ造詣スル所ナカルヘカラス

終リニ望ミ受験者ニ向ツテ一言スヘキコトアリ何ソヤ曰ク外交官及領事官試験ノ至難  
 カルコト是レナリ總テ受験者ハ大學高商或ハ其他ノ學校ニ於テ多年ノ研鑽ヲ積ミ十分  
 素養ヲ作りタル人ナリト雖モ初回ノ試験ニテ月桂冠ヲ戴ク者ノ如キハ曉天ノ星ノ如ク  
 甚々稀ナリ例年ノ成績ニ鑑ルモ初回合格者ハ其全數ノ三分ノ一ヲ過キス而シテ此等ノ  
 人ハ成績優秀ナルノミナラス元來超凡ノ資質ヲ有スル人ナルカ故ニ常ニ練々タル餘  
 裕アリテ在學當時既ニ本試験ヲ受クルニ付キ不得意ナル學科ヲ校課以外ニ準備スルヲ  
 得タルナリ然レハ受験者ハ假令一二回失敗ノ悲運ニ遭遇スルコトアルモ不撓不屈其素  
 志ヲ挫ケサルコトヲ心掛ケサルヘカラス若シ一二回ノ失敗ニ因リ直ニ素志ヲ滅スカ如

N.  
 一回ニ  
 席ヲ  
 見  
 かん



キ薄志駑行ノ人ナラハ寧ロ初ヨリ外交官ヲ志望セサルニ如カサルヘシ況ムヤ成績劣等ヲ以テ初回ニ合格セムヨリモ優等ヲ以テ次回ニ通過スル方將來ノ爲メ利益ナルヘキヲヤ故ニ受験者ハ稟禱一番決シテ中途挫折スルカ如キコトナカラムヲ要ス

### 第四章 試験手續及受験上ノ用意

外交官及領事官試験ハ分ツテ論文、第一次試験及ヒ第二次試験ノ三階段トス

#### 第一 論文試験

論文ノ問題ハ毎年七月一日前後ニ官報ニ依リテ發表セラル毎年ノ例ニ依レハ其問題ハ國際公法ニ關スルモノナリ之カ論文ハ日本文ニテ美濃紙十二行三十字詰十五枚ヲ限リ是レニ外國語ノ譯文ヲ添ヘ九月初旬ノ頃試験委員長宛ニテ差出スモノトス譯文ニ用ウヘキ外國語ハ英佛獨ノ中第一次試験ニ受験セムト欲スル一箇國語ヲ撰ムヘキナリ論題ハ例年ニ徵スルニ頗ル妙味アル好箇ノモノナルカ故ニ普通ノ教科書ヲ精讀スルノミニテハ満足ス可キ論文ヲ草スルコト能ハサルヘク必ス原書ノ數種ヲ通讀參照スル所アラサルヘカラス從テ之レカ調査ニ多時ヲ費スノミナラス尙ホ之ヲ外國語ニ譯スルニ

モ亦多少ノ時間ヲ要スルヲ以テ其完成迄ニハ少クモ二十日以上ノ經過ヲ見ルナルヘシ然レトモ論文ノ良否ハ以テ一應受験資格ヲ判斷スルノ材料タルニ止マリ全般ノ成績ニハ何等ノ影響ヲ與フルモノニアラサルカ故ニ餘リニ之ニ向ツテ精力ヲ盡シ他ノ學科ヲ等閑ニ附スルカ如キハ策ノ得タルモノト云フヘカラス殊ニ大學高商ノ卒業生ノ如キ十分ノ素養ヲ蓄フル者ニ在リテハ論文試験ニ不合格トナリタル例稀ナルヲ以テ其積リニテ他ノ學科トノ權衡ヲ採ルヘシ論文ハ日本文外國文共ニ自筆タルコトヲ要ス又外國文ノ用紙ハ美濃判ニ準スルヲ要スルヲ以テ彼ノ「アイ」判洋紙ヲ用フルコト可ナラムカ論文ハ大抵九月初旬迄ニ差出スヘク其結果ハ九月中旬ニ至リテ定マリ茲ニ合格者ニ向ツテ第一次試験開始ノ通知アルモノトス

#### 第二 第一次試験

第一次試験ハ公文摘要、口述要領筆記、作文、外國語ノ四科ニ付キ之レヲ行フ公文摘要ハ例ヘハ或事件ニ就キ外務省ト在外公使トノ間ニ往復セル電報書信ノ一括セルモノヲ委員ヨリ交付セラルルヲ以テ受験者ハ之ヲ材料トシ其要ヲ摘ミ事件ニ關スル一ノ記事文ヲ作成スルモノナリ茲ニ少シク注意スヘキハ本答案起草時間ハ一時半ニ過



キサルヲ以テ受験者ハ敏速ニ其材料タル文書ヲ閱了シ唯タ其要領ヲ抽出シテ答案ヲ作ルニアラサレハ遂ニ噬臍ノ悔ヲ貽スニ至ラム  
 口述要領筆記ハ或事件ニ關スル試験委員ノ口頭叙述ヲ聞キ了リタル後其要領ヲ記述スルモノナリ從テ之ヲ前ノ公文摘要ニ比スルニ甚タ容易ナルモノナリ  
 作文ハ或外交問題ニ關スル論題ヲ與ヘラルルカ或ハ或事件ニ關スル在外公使ノ報告ニ擬スルノ文ヲ作ラシメラルルナリ之ヲ日本文及外國文ニテ三時間ニ作成スルヲ要スルヲ以テ時間ノ不足ヲ感スルヲ常トス故ニ受験者ハ豫メ注意スル所ナカルヘカラス  
 外國語ハ英佛獨中各自其好ム一箇國語ニ付キ別別ニ試験スルモノニシテ普通書取、譯讀、會話等凡テノ方面ヨリ受験者ノ實力ヲ試スモノナリ最モ試験規則ニ依リテモ知リ得ル如ク外交官試験ニハ唯タ一外國語ノ試験ヲ受クレハ足ルモノナレトモ希望ニ依リテハ二箇國語ノ試験ヲ受クルコトヲ得ヘシ但シ爲ニ受験者ニ取リ利ナルヤ否ヤハ疑問ナリ

尙ホ外國語ニ付キ注意スヘキハ此試験ハ文官高等試験ト異ナリ語學ニ重キヲ置クハ勿論ナルモ其程度ハ年年寧ロ容易トナルノ傾アリ從テ噂ノ如ク至難ナルモノニアラス是レ妨間ニ外務省ハ方針ヲ一變シ從來ノ如ク外國語ニ重キヲ置カス寧ロ人物ヲ得ルヲ主眼トスルニ至レリトノ風聞アル所以ナランカ  
 第一次試験ヲ了リ約一週間ヲ經過スルトキハ其合格者ニ對シ第二次試験召集ノ通知アルヘシ

第三 第二次試験

第二次試験ハ筆記及ヒ口述ニ分タレ筆記試験ハ憲法、國際公法、國際私法及經濟學ノ四必須科目ト他ノ二撰擇科目ヲ科セラル試験場ニ於ケル注意事項ハ前編ニ於テ述ヘタル所ヲ參酌スヘシ

筆記試験終了ノ後待ツコト約一週間ニシテ合格者ニ向ヒ再ヒ口述試験開始ノ通知來ル口述試験ニ至リテハ最初ノ志願者假リニ約五十名トセハ僅々二十名ヲ殘スニ過キサレヘシ論文、第一次試験及第二次筆記試験ニ於テ各々凡十名ツツ不合格者ヲ出スノ割合ナリ口述試験ハ一日一科目ツツ抽籤ノ方法ニ依リ順次施行セラル而シテ一人ニ付キ約二十分ツツ委員ヨリ或一二ノ問題ヲ提出シテ辯難追究セラルルナリ口述試験ニ必要ナル用意ハ是レ亦前編ニ述ヘタル所ヲ參酌スヘシ



最後ニ注意スヘキハ毎年ノ例ニ依レハ外交官試験ト高等文官試験トハ試験日衝突セサル様定メラルルカ故ニ受験者ハ雙方ニ應スルコトヲ得ヘシ然レトモ吾人ハ斯ク二兎ヲ追フ人ノ可ナル所以ヲ知ラサルナリ又從來ノ例ニ依ルモ斯ル人ノ外交官試験ニ合格セル例ヲ聞カス

### 第五章 合格後ノ注意

愈々口述試験ヲ終ラハ約十五日ニシテ合格者ハ試験委員長ヨリ其報知ニ接スヘシ而シテ外交官試験ハ文官高等試験ト異ナリ資格試験ニアラスシテ任用試験ナルカ故ニ合格者ト雖モ二年以内ニ任用セラレサルトキハ其資格消滅スルモノトス然レトモ實際ニ於テハ合格者ハ悉ク採用セラレサルノ憂ナク從來ノ例ニ徴スルニ遅クモ一年以内ニハ成績佳良ナリシ者ヨリ順次ニ外交官補又ハ領事官補ニ任命セララルルヲ常トス故ニ合格者ハ就官ノ運動ヲ爲スノ要ヲ見ス  
更ニ注意スヘキハ外交官補ノ所要人員ハ領事官補ノ所要人員ニ比シ僅少ナルヲ以テ首席次席一二人ノ外ハ領事官補ニ任命セララルル慣例ナリ然レトモ領事官補ノ外ハ官補

又ハ三等書記官ニ轉補セララルルコトハ其例多キヲ以テ領事官補ニ任命セラレタリトテ永久領事官ニテ終ルモノニアラス外務省ハ其材ノ適否ヲ裁量シ外交官又ハ領事官ニ轉官流用スルモノトス  
外交官補又ハ領事官補ニ任命セラレタル者ハ規則上ハ直ニ指定セラレタル海外任地ニ趣カサルヘカラサルモ實際ニ於テハ大概本省ニテ四五箇月間事務ヲ習得シタル後任勤地へ赴任スルモノトス



第六章 關係法規

◎外交官領事官及書記生任用令

- 第一條 外交官及領事官ハ外交官及領事官試験ニ合格シタル者ニアラサレハ任用スルコトヲ得ス
- 第二條 本令ニ依リ初メテ外交官又ハ領事官ニ任用セラルル者ハ外交官補又ハ領事官補トス
- 第三條 外交官補及領事官補ハ外國ニ在勤シタル後ニアラレハ其ノ他ノ外交官又ハ領事官ニ任用スルコトヲ得ス
- 第四條 本令ニ依リ任用シタル外交官及領事官ニシテ在職滿一年以上ノ者ハ外務省高等官ニ外務省高等官ニシテ在職滿一年以上ノ者ハ外交官又ハ領事官ニ任用スルコトヲ得
- 前項ニ依リ外交官又ハ領事官ニ任用スル者ニハ本令第二條ヲ適用セス
- 第五條 「公使館書記生及領事館書記生」ハ「公使館書記生及領事館書記生」試験ニ合格

シタル者ニアラサレハ任用スルコトヲ得ス

- 第六條 本令ニ依リ任用シタル「公使館書記生又ハ領事館書記生」ニシテ在職滿一年以上ノ者ハ外務省判任官ニ外務省判任官ニシテ在職滿一年以上ノ者ハ「公使館書記生又ハ領事館書記生」ニ任用スルコトヲ得

- 第七條 外交官及領事官試験規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

「公使館書記生及領事館書記生」試験規則ハ外務大臣之ヲ定ム

- 第八條 特命全權公使、辨理公使ハ本令ノ規定ニ拘ラス之ヲ任用スルコトヲ得

- 第九條 外務省留學生ハ別ニ試験ヲ要セス「公使館書記生又ハ領事館書記生」ニ任用スルコトヲ得

外務省留學生ニ關スル規程ハ外務大臣之ヲ定ム

- 第十條 本令施行ノ際外務省高等官、外交官又ハ領事官ノ職ニ在ル者ハ第四條ノ制限ニ拘ラス任用スルコトヲ得

- 第十一條 本令施行ノ際外務省試補タル者又ハ試補ニ採用セラルヘキ資格ヲ有シテ「公使館書記生又ハ領事館書記生」タル者ハ別ニ試験ヲ要セス外交官補又ハ領事官補



ニ任用スルコトヲ得

第十二條 本令施行ノ際外務省判任官〔公使館書記生又ハ領事館書記生〕タル者ハ第六條ノ制限ニ拘ラス任用スルコトヲ得

附 則

第十三條 公使館又ハ領事館ニ雇員トシテ現ニ在勤スル者ハ本令施行ノ後三箇月間ニ限り試験ヲ要セス〔公使館書記生又ハ領事館書記生〕ニ任用スルコトヲ得

第十四條 本令ハ貿易事務官ニ適用ス

第十五條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス  
明治二十二年閣令第五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎領事官特別任用令

第一條 公使館書記生及領事館書記生ニシテ滿五年以上在外公館ニ勤務シ三級以上ノ俸給ヲ受クル者ハ外交官及領事官試験委員ノ銓衡ヲ經テ副領事又ハ貿易事務官ニ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ任用シタル者ハ領事及總領事ニ任用スルコトヲ得  
第三條 (刪除)

附 則

第四條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス  
明治二十五年勅令第十三號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

◎外交官領事官及貿易事務官特別任用ニ關スル件

第一條 外務書記生ニシテ滿五年以上公使館領事館又ハ貿易事務官ニ勤務シ三級以上ノ俸給ヲ受クル者ハ本令施行後三年間ニ限り外交官及領事官試験委員ノ銓衡ヲ經テ外交官ニ任用スルコトヲ得

第二條 公使館一等通譯官及公使館二等通譯官ニシテ滿二年以上公使館ニ勤務シタル者ハ本令施行後三年間ニ限り外交官及領事官試験委員ノ銓衡ヲ經テ前官ノ任國外ノ外交官領事官又ハ貿易事務官ニ任用スルコトヲ得

第三條 外務省翻譯官ニシテ在職滿三年以上ノ者ハ本令施行後三年間ニ限り外交官及



領事官試験委員ノ銓衡ヲ經テ外交官領事官又ハ貿易事務官ニ任用スルコトヲ得

第四條 明治二十六年勅令第百八十七號外交官領事官及書記生任用令施行前外交官又

ハ領事官トシテ滿二年以上公使館又ハ領事館ニ勤務シタル者ハ外交官及領事官試験

委員ノ銓衡ヲ經テ外交官領事官又ハ貿易事務官ニ任用スルコトヲ得

第五條 明治二十六年勅令第百八十八號領事官特別任用令明治二十九年勅令第百八十

二號又ハ本令ニ依リ任用シタル外交官領事官又ハ貿易事務官ハ外交官領事官及貿易

事務官ノ間ニ轉任スルコトヲ得

第六條 本令ハ明治三十年十月一日ヨリ施行ス

◎通譯官ヲ外交官及領事官ニ任用ノ件

公使館一等通譯官及公使館二等通譯官ニシテ在職滿二年以上ノ者ハ外交官又ハ領事官ニ任用スルコトヲ得但其ノ在勤地ハ前官ノ任國內ニ限ル

◎外交官及領事官試験規則

第一條 外交官及領事官試験ハ須要ニ應シ外務省ニ於テ外交官及領事官試験委員之ヲ行フ

第二條 外交官及領事官試験ヲ行フヘキ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三條 年齡滿二十年以上ノ男子ニシテ左ノ諸項ノ一ニ該當セサル者ハ外交官及領事官試験ヲ受クルコトヲ得

一 重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニアラス

二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

三 破産若クハ家資分産ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨濟ヲ終ヘサル者

第四條 外交官及領事官試験ヲ受ケント欲スル者ハ其ノ出願書ニ履歷書及論文並ニ之ヲ英文、佛文又ハ獨逸文ニ翻譯シタルモノヲ添ヘ之ヲ試験委員ニ差出スヘシ

前項ノ書類ハ總テ出願人ノ自筆タルヘシ

第五條 外交官及領事官試験ハ前條ノ履歷書及論文並ニ其ノ譯文ニ就キ試験ヲ受クルニ足ルヘキ者ト試験委員ニ於テ認メタル者ヲ召集シテ之ヲ行フ



第六條 外交官及領事官試験ヲ分チテ第一次試験及第二次試験トス第一次試験ニ合格シタル者ニアラサレハ第二次試験ヲ受クルコトヲ得ス

第七條 第一次試験ハ左ノ科目ヲ用キテ之ヲ行ヒ仍體格ヲ検査ス

一 作文(邦文並ニ第四條ノ譯文ニ用キタル外國文)

二 外國語(第四條ノ譯文ニ用キタル國語)

三 公文摘要(邦文)

四 口述要領筆記(邦文)

第八條 第二次試験ハ左ノ科目ヲ用キテ之ヲ行フ

一 憲法 二 國際公法

三 國際私法 四 經濟學

以上ノ科目ハ試験ノ際選擇取捨スルコトヲ得ス

一 行政法 二 刑法

三 民法 四 商法

五 刑事訴訟法 六 民事訴訟法

改正

七 財政學  
九 外交史

八 商業學  
十 商業史

以上ノ科目ハ受験者ヲシテ其ノ中ニ就キ豫メ二科目ヲ選擇セシメ之ヲ試験ス

第九條 第二次試験ハ分チテ筆記試験及口述試験トス筆記試験ニ合格シタル者ニアラ

サレハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十條 出願人ノ願ニ依リ英語、佛語又ハ獨逸語ノ外仍他ノ外國語ヲ試験スルコトアルヘシ

前項ノ試験ヲ受ケント欲スル者ハ其ノ旨豫メ出願書ニ記載スヘシ

第十一條 外交官及領事官試験ヲ出願スル者ニハ手数料トシテ金十圓ヲ納メシム

第十二條 不正ノ方法ニ因リ試験ヲ受ケント企テタル者及試験ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ其ノ期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス試験合格ノ後是等ノ事實發覺シタルトキハ其ノ合格ヲ無効トス

第十三條 試験合格者ヲ定ムル方法ハ試験委員ノ議定スル所ニ依ル

試験合格ノ有効期限ハ合格後外交官又ハ領事官ニ任用セラレタル者ヲ除ク外二箇年



間トス

第十四條 外交官及領事官試験ニ關スル細則ハ外務大臣之ヲ定ム

◎外交官及領事官試験規則施行細則

第一條 外交官及領事官試験規則第四條ニ依リ差出スヘキ出願書及履歷書ハ別記甲號  
雛形及乙號雛形ニ依リ調製スヘシ

第二條 前條ノ出願書及履歷書ハ試験期日十日前ニ差出ス可シ

第三條 受験者ニシテ試験當日開試ノ時刻ニ出席セサル者ハ當期ノ試験ヲ受クルコト  
ヲ得ス

第四條 外交官及領事官試験規則第八條ニ掲クル受験者ノ選擇科目ハ別ニ記載シ出願  
書ニ添ヘ差出スヘシ

第五條 外交官及領事官試験規則第六條ニ依リ第二次試験ノ召集ヲ受ケザル者ハ第一  
次試験ニ合格セサルモノトス

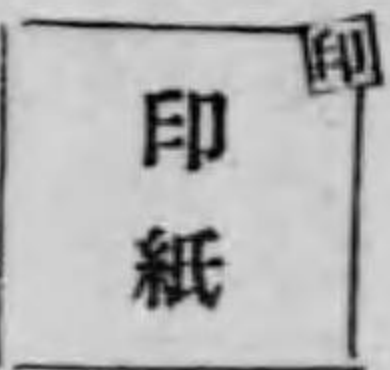
第六條 外交官及領事官試験規則第九條ニ依リ第二次口述試験ノ召集ヲ受ケサル者ハ

第二次筆記試験ニ合格セサル者トス

(別記)

甲號雛形(用紙美濃紙但譯文用紙ハ西洋  
紙美濃紙ノ幅員ニ均シキモノ)

試験願書



姓

名

生年月日

満何年何箇月

私儀外交官及領事官試験相受度候ニ付同規則第四條ニ掲クル書類相添此段奉願候也  
(外交官及領事官試験規則第十條ニ依リ英、佛、獨語ノ外尙ホ他ノ外國語試験志願  
者ハ其旨ヲ追書ニ記載スヘシ)

年月日

本籍

現住所

姓

名



外交官及領事官試験委員長宛

乙號雛形(用紙美濃紙但譯文用紙ハ西洋紙美濃紙ノ幅員ニ均シキモノ)

履歷書

何府縣華士族平民

戸主又ハ某嗣子若クハ何男

姓 名

生年月日

滿何年何箇月

- 一父〔何府縣華士族平民(農工商)(官位)何某(亡)〕
- 一母〔同上 何某(亡)女某(亡)〕
- 一養父〔同上 何某(亡)〕
- 一養母〔同上 何某(亡)女某(亡)〕
- 一子某(男女)

一本籍(何府縣何郡何町村何番地)

一現在地(同上)

一學事(何年何月ヨリ何地何官公立學校ニ入り何學科ヲ修業何年何月卒業證書アラバ其寫全文)

一職業(何年何月ヨリ何地何會社又ハ何某ニ雇ハレ給料何圓何々ノ業務ニ從事シ何年何月解雇又ハ辭職)

一任免(何年何月何官廳何官拜命何年何月増俸、轉官、辭職、免職各辭令ノ全文)

一賞罰(賞狀寫及懲罰文寫)

右ノ通

年 月 日

姓

名 圖

◎外交官及領事官試験委員官制

第一條 外交官及領事官試験ヲ施行スル爲ニ外交官及領事官試験委員ヲ置キ外務大臣ノ管轄ニ屬セシム

第二條 外交官及領事官試験委員ハ左ノ人ヲ以テ組織ス

第二編 外交官及領事官試験 第六章 關係法規



委員長 外務次官  
 委員 外務省政務局長 外務省通商局長 文官高等試験委員二名 帝國大學教  
 授二名

外務次官、外務省政務局長又ハ外務省通商局長ニ闕員又ハ事故アルトキハ臨時他ノ  
 高等官ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 前條委員ノ外臨時必要アルトキハ臨時試験委員ヲ命スルコトヲ得

第四條 外交官及領事官試験委員ハ職務上當然委員長又ハ委員タル者ヲ除クノ外外務  
 大臣ノ奏請ニヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ス臨時委員亦同シ

第五條 試験事務ニ關シ庶務ニ從事セシムル爲ニ書記ヲ置キ外務省判任官ヲ以テ之ニ  
 充ツ

第六條 外交官及領事官試験委員並臨時試験委員ニハ外務省官吏ヲ除クノ外年額百圓  
 以内ノ手當金ヲ給スルコトヲ得

附 則

第七條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

第三編 判事檢事登用試験

第一章 司法官ノ意義及地位

司法官トハ司法權ヲ行フ權限ヲ有スル國家機關ヲ組織スル官吏ナリ然リ而シテ憲法第  
 五十七條ハ規定シテ曰ク「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」ト故  
 ニ裁判所ハ即チ司法權タル國家統治權ヲ行使スル國家ノ機關ニシテ他ノ一般行政機關  
 ノ如ク天皇ノ委任ニヨリ其命令權ニ服從スルニアラスシテ只法律ノミ依從スル獨立  
 ノ機關タリ即チ裁判所ハ天皇ノ名ニ於テ司法權ヲ行使スト雖モ決シテ天皇ノ自由意思  
 ニ依リテ左右スヘキニアラサルナリ是レ司法權ノ獨立ヲ維持スルカ爲メニシテ其司法  
 權ノ獨立ヲ維持セントスルニハ法律ヲ以テ訴訟手續ヲ定ムルト共ニ其機關ノ組織モ亦  
 法律ヲ以テ之ヲ定メサルヘカラス行政官廳ハ常ニ上級官廳ニ隸屬シ其指揮ニ從フヘキ  
 モノナルモ司法官廳ハ下ハ區裁判所ヨリ上ハ大審院ニ至ルマテ其審級上ノ區別アルモ  
 是レ單ニ上訴ノ順序ヨリ生スル區別タルニ過キスシテ其職權ノ範圍内ニ於テハ完全ニ  
 獨立スルモノニシテ上級審ノ命令ヲ以テ其權限ヲ左右スルヲ得サルナリ斯クノ如ク裁



判ノ公平ヲ維持スルカ爲メニハ其裁判所ヲ構成スル裁判官ノ地位ヲシテ各種ノ威力壓迫ヲ受クルコトナカラシムルヲ要ス是レ裁判官ノ地位ヲシテ獨立ナラシムル所以ナリトス

而シテ其獨立ノ權限ヲ有スル裁判官タルニハ裁判所ヲ組織スル職員タルコトヲ得ル能力ヲ有セサルヘカラス從テ其能力ナキモノハ裁判所ノ職員タルヲ得サルナリ而シテ其能力即チ司法官ニ任セラルルニ必要ナル準備及ヒ資格ニ就テモ行政官ノ如ク命令ヲ以テ之ヲ定メスシテ裁判所構成法ノ第二編ニ於テ之ヲ規定セリ

世間通常司法官ト稱スル者ハ判事及ヒ檢事ノ兩者ヲ含ムモノナリト雖モ正確ニ之ヲ謂フトキハ甚タ當ラス判事ハ眞ノ意義ニ於ケル司法官トシテ終身官タルノ保障ヲ有シ行政上ノ掣肘ヲ受クルコト無キ獨立ノ地位ヲ認メラルモノニシテ所謂司法權ナルモノハ獨リ判事ニ依リテ構成セラルル裁判所カ之ヲ行フモノナリ彼ノ檢事ノ如キハ亦司法機關トシテハ判事ト相駢ヒテ重要ノ地位ヲ占ムト雖モ而モ判事ノ如ク獨立ノ地位ヲ有スルモノニ非ス裁判所構成法ノ第八十二條ニ「檢事ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ」ト規定セラルルカ如ク常ニ上司ノ監督指揮ニ從ハサルヘカラサルモノニシテ其本質ハ行政官

タリ而シテ檢事ノ最高監督權ハ司法行政ノ最高機關タル司法大臣ニ屬シ司法大臣ノ指揮命令ニハ絕對ニ服從セサルヘカラス或人ニ對シテ刑事訴追ヲ爲スヘキヤ否ヤノ如キモ亦上官ノ指揮ニ違フヲ得ス然ルニ世間往々斯ル事實ヲ捉ヘテ司法權ノ獨立ヲ侵スモノノ如ク論議スル者アルハ法制ノ大體ニ通セス檢事ノ地位ヲ識ラサルニ座セル謬論タリ

上述ノ如ク判事ト檢事トハ其地位ニ於テ絶大ノ差異ヲ存スト雖モ司法權運用ノ機關トシテ前者ハ法律ノ解釋適用ヲ司リ後者ハ公益ヲ代表シテ司法ノ適實ニ施行セラルルコトヲ促スヲ職トシ兩々輕重ヲ見ス從テ檢事ノ任用資格ノ如キモ亦全ク判事ト同一視シ均シク裁判所構成法ノ第二編ニ於テ之ヲ規定シ其登用試験ハ兩者ヲ合一シ何等ノ差別ヲ設ケサルナリ

## 第二章 判事檢事ノ資格及任用

### 第一 判事檢事ノ資格

判事檢事ニ任セラルルニハ一回ノ競争試験ヲ經テ合格シタル者ナルヲ要スルモ三箇年



以上帝國大學法科教授若クハ辯護士タル者ハ此二回ノ競争試験ヲ經ルヲ要セスシテ判事又ハ檢事ニ任セラルルヲ得ヘク又帝國大學法律科卒業生ハ第一回試験ヲ經スシテ試験ヲ命セラルルノ特權ヲ享有スルモノナリ而シテ其第一回試験ヲ受クルヲ得ル必要ナル資格及ヒ其試験ニ關スル詳細ハ後ニ述フル試験規則中ニ之ヲ定メラレタリ

其第一回試験ニ合格シタル者ハ第二回試験ヲ受クルノ前試験トシテ裁判所及ヒ檢事局ニ於テ一年六箇月ノ間實地修習ヲ爲シ第二回ノ競争試験ヲ經テ之ニ及第シタル試験ハ判事又ハ檢事ニ任セラルルヲ得ルモノトス

判事又ハ檢事ニ任セラルル資格ハ上述ノ如ク學識上ノ資格ヲ要スルト共ニ左ニ掲ケタル者ニアラサルヲ要スルモノトス

- 一 重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限リニ在ラス
- 二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者
- 三 身代限リノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

### 第二 判事ノ任用

判事ハ親任、勅任又ハ委任トシ終身官トス故ニ法定ノ事故發生スルニアラサレハ免官

又ハ其意ニ反シテ轉任ヲ命スルヲ得サルナリ是レ其獨立ノ地位ヲ有スルヨリ生スル當然ノ結果ナリトス

大審院長ハ親任判事ヲ以テ之ヲ親補シ各控訴院長及ヒ大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任判事ノ中ヨリ之ヲ補ス其他ノ判事ハ司法大臣之ヲ補スルモノトス

地方裁判所又ハ區裁判所ノ判事ハ第二回試験ニ合格シタル試験補三年以上帝國大學法科教授又ハ辯護士タル者ヨリ任命セラルヘキハ前述ノ如クニシテ若シ新任ノ判事ニ補スヘキ缺位ナキ場合ハ豫備判事トシテ勤務スルコトヲ命シ其任用セラレタル裁判所ノ判事ニ差支アリテ職務ニ従事スルヲ得ス且ツ通常ノ代理ノ規定ニ因リ難キ場合ニ於テ之ヲ代理スルモノトス

控訴院ノ判事ハ五ヶ年以上判事タル者又ハ五ヶ年以上檢事帝國大學法科教授若クハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレタル者ニ限リテ補セラルヘキナリ

大審院判事ニ補セラルヘキ者ハ十年以上判事タル者又ハ十年以上檢事帝國大學法科教授若クハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレタル者ニ限ルモノトス

### 第三 檢事ノ任用



検事ハ刑事ニ就テハ公訴ヲ提起シ其取扱上必要ナル手續ヲナシ法律ノ正當ニ適用セラ  
ルルヤ否ヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ其意見ヲ述フル司法行政  
ノ機關ニシテ上官ノ命令ニ從ヒテ前述ノ國務ヲ處理スルモノニシテ裁判官トハ全然其  
性質ヲ異ニス從テ其地位ノ保障モ裁判官ノ如ク鞏固ナラス而シテ其検事ハ勅任又ハ奏  
任ニシテ検事總長ハ勅任検事ヲ以テ之ヲ親補セラレ検事長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅  
任検事ノ中ヨリ之ヲ補シ其他ノ検事ノ職ハ勅任検事又ハ奏任検事ノ中ヨリ司法大臣之  
ヲ補スルモノトス

検事總長、検事長及ヒ検事正ハ其各管轄區域内ノ裁判所ノ検事ノ職務ノ範圍内ニ在ル  
事務ヲ自ラ取扱フノ權ヲ有シ又其管轄區域内ニ於テ或ル検事ノ取扱フヘキ事務ヲ他ノ  
検事ニ移スノ權ヲ有スルモノニシテ法律上ニ於テハ之ヲ檢事同一體ノ原則ト謂フ

## 第二章 受験ノ準備

判事検事ノ登用試験ニ應スヘキ學識上ノ能力ヲ涵養スルニハ文官試験ニ應スル準備ト  
敢テ異ナラサルモ兩者ハ學科目ノ差異アルノミナラス其主要トスル學科ニ於テモ異ナ

レルヲ以テ其受験者ハ亦此ニ注意セサルヘカラス即チ文官試験ニ應スル者ハ憲法、行  
政法、民法、經濟ノ如キ文官タルニ直接必要ナル學科ヲ主眼トスヘキモ判事検事試験  
ハ司法官タルニ直接必要ナル學科即チ民法、刑法、商法及ヒ刑事民事訴訟法ノ五科目  
其主要タリ加之文官試験ノ問題ハ多ク法律ノ大體ニ通スレハ解決シ得ヘキモ判事検事  
ノ試験ニ科セラルル問題ハ多ク難問ナルヲ以テ緻密ニ調査スルニアラサレハ之カ解答  
ヲ爲ス能ハサルノ傾向アルハ從來ノ問題集ニ徴シテ掩フヘカラサルノ事實ナルカ上ニ  
判事検事試験ニ應スル者ハ大學卒業生ノ如ク秩序正シキ準備ヲナササルヲ以テ普通學  
ニ對シテハ彼レニ劣ルヘシト雖モ競争者ノ多數ナルヨリ法律學ト所謂首引ヲ爲シテ研  
究シ微細ノ點ニ至ル迄知悉セル者多キヲ以テ之等ト競争場裡ニ於テ逐鹿ノ輸贏ヲ決ス  
ルニハ亦之等ニ優ルノ覺悟ト努力ナカラサルヘカラス然リ而シテ法律學ハ前ニモ屢々  
述ヘタルカ如ク法理錯雜セルヲ以テ如何ニ萬卷ノ書ヲ讀ミテ之ヲ腦裡ニ藏スルモ之ヲ  
秩序正シク發表スルノ術ニ拙ナレハ常ニ落第ノ悲運ニ遭遇スルヲ免レサルナリ從テ受  
験生ハ緻密ニ讀書シテ思考推理以テ鞏固ナル觀念ヲ作ルト共ニ同志ヲ叫合シテ口頭又  
ハ筆頭ニテ其發表ノ術ヲモ稽古スルノ必要アル所以ニシテ東京ノ數多キ下宿屋ニ數人



集合シ法律ノ議論ヲ闘ハシツツアルヲ聞クハ是レ即チ其研究會ナリ受験者ノ現状如斯ナルカ故ニ獨學者ニシテ及第スルハ至難ノ業ナリト謂ハサルヘカラス又舊時ハ著書論文ノ講究ヲ以テ足レルモノノ如ク考ヘラレタルモ近時法律ノ研究カ漸次實際的方面ニ近接シツツアルハ争フヘカラサル勢ナルヲ以テ時々ノ實際問題殊ニ新判例ニ就キ充分ノ智識ヲ涵養スルコトヲ忘ルヘカラス

#### 第四章 試験手續及受験上ノ用意

##### 第一 判事檢事試験委員

判事檢事ノ試験委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織スルモノニシテ其第一回試験委員長及ヒ委員ハ司法省高等官及ヒ大審院控訴院ノ判事檢事中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命スルモノナリ  
第二回試験委員長ハ司法次官ヲ以テ之ニ充テ試験委員ハ常任委員ヲ三名トシ司法省高等官及ヒ大審院控訴院ノ判事檢事中ヨリ司法大臣之ヲ命シ其他ノ委員ハ司法省高等官及ヒ大審院控訴院ノ判事檢事中ヨリ臨時ニ司法大臣之ヲ命スルモノナリ

判事檢事登用試験委員ハ試験ノ監督答案ノ考査及ヒ及落ノ評議ニ與ルモノニシテ試験委員長ハ委員ヲ監督シ試験ニ關スル一切ノ事務ヲ總理處分スヘキモノナリ其委員長ニ缺員又ハ事故アル場合ニハ上席ノ委員之ヲ代理スヘキ定メナリ

##### 第二 受験資格

判事檢事試験ハ前款ニ述ヘタルカ如ク登用試験ナルカ故ニ判事檢事ニ任用セラルル場合ニ具備スヘキ裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試験ヲ受クルコト能ハサルノミナラス又身分上學識上ノ資格ヲ具備スルヲ要ス即チ試験ヲ受クルヲ得ル者ハ年齢成年以上ノ男子ニシテ其學識上ノ資格ハ官立學校專門學校令ニ依ル公立又ハ私立ノ學校(別科ヲ除ク)ニ於テ三ヶ年以上法律學ヲ履修シテ卒業證書ヲ有スル者並ニ司法大臣ニ於テ相當ト認メタル外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學科ヲ履修シテ卒業證書ヲ有スル者ナルヲ要ス

##### 第三 第一回試験

判事檢事登用試験ハ辯護士試験ト連續シテ毎年一回司法省ニ於テ之ヲ施行シ其期日ハ試験委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告スルモノニシテ慣例ハ六月上旬ニ試験委員ノ發表



ト相前後シテ試験期日ヲ發表セラレ本試験ノ筆記試験ハ九月下旬口術試験ハ十一月中ニ行ハルルヲ例トス

試験ハ之ヲ分チテ豫備試験及ヒ本試験トシ尙身體検査ヲモ行フ之レ心身ノ健全ナル者ニアラサレハ官吏タル責務ヲ盡スヲ得サレハナリ豫備試験ハ論文外國語(英、佛、獨ノ中一種ヲ選ハシム)ニ付キ施行シ其各受験者カ本試験ヲ受クル普通ノ學識ヲ有スルヤ否ヤヲ考試スルヲ目的トス然レトモ豫備試験ハ當分ノ施行セラレサルコトト爲リタリ

本試験ハ受験者ノ専門ノ學識ヲ試験スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二様トス  
筆記試験ハ憲法、民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、行政法、國際公法、國際私法ノ各科目ニツキ之ヲ施行ス

試験委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試験ヲ爲スニ足ルヘキ者ト認メタルトキハ口述試験及ヒ身體検査ノ爲メ志願者ヲ呼出スナリ而シテ其口述試験ニ民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法ノ中少クモ三科目ニ付キ之ヲ施行スルモノトス  
筆記試験及ヒ口述試験ニ於ケル注意事項ハ第一編ニ於テ説述シタル所ヲ參酌スヘシ

受験者ノ及落、及第者ノ優劣ハ筆記試験口述試験ノ成績ニ對スル委員過半数ノ意見ニ從テ之ヲ決スヘキナリ

及落ニ付キテ委員ノ意見相半ハスルトキハ落第ト看做サルナリ又志願者カ口述試験ニ闕席シタルトキハ試験ハ成立タス尙ホ學科ノ試験ニ合格スルモ身體検査ニ合格セサル者ハ落第者タルナリ

以上ノ如ク審査ニ審査ヲ重ネテ及第シタルトキハ其及第者ノ氏名及ヒ其試験ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘキモノトス

然レトモ帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第一回試験ヲ經スシテ司法官試補ニ任用セラル此場合ニ於テハ試験志願者ト略同一ノ志願書ヲ司法大臣ニ差出サシムルナリ

#### 第四 實地修習

判事檢事登用第一回試験ニ及第シタル者又ハ帝國大學法律科卒業生ハ司法官試補ニ補セラレテ區裁判所及ヒ地方裁判所並ニ其檢事局ニ於テ一名若クハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習セサルヘカラス其修習ノ監督ハ地方裁判所長之ヲ爲シ檢事局事



務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ指揮ス

修習スル裁判所ノ良否及ヒ直接監督ノ任ニ在ル地方裁判長又ハ檢事正ノ善惡ハ修習ノ成績ニ影響スルコト勿論ナリ一般ニ東京ハ學問上ニ於テモ又實務上ニ於テモ研究ノ便宜多キヲ以テ及第者ノ大多數ハ東京地方裁判所ニ於テ修習センコトヲ志望スト雖モ是等ノ志望ハ悉ク之ヲ認容スル限リニ在ラス又時ニハ無給ヲ條件トシテ志望ヲ認容セララルノ實例ナキニ非ス又縱令無給ト云フモ凡ソ六ヶ月位ノ修習ヲ了ヘテ檢事代理ヲ命セララル時ニ至ラハ必ラス試補給ヲ給セラルヲ以テ要スルニ六ヶ月ノ無給ヲ忍ンテ修習地ノ志望ヲ容レラルルカ否カニ歸ス

裁判所長若クハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及ヒ職務外ノ行狀竝ニ執務ニ關シ成績ノ證明書ヲ作り控訴院長費檢事長ヲ經テ之ヲ司法大臣ニ差出スヘキモノトセリ

試補ハ修習目錄ヲ作り其取扱ヒタル事件ヲ記載シ其目錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閱ヲ受クヘキナリ

試補ノ疾病又ハ兵役服務ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一年六箇月間二箇月以内ナルトキハ修習ノ日數ニ算入スルモノトス賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一年六箇

月間一箇月以内亦修習日數ニ算入スヘキモノトス

試補ノ直接監督者タル裁判所長檢事正ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若クハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘキナリ然リ而シテ此場合ニハ其諭告シタル旨ヲ試補ノ履歷ニ記入スヘキナリ

試補ノ職務上若クハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不充分ニシテ第二回試験ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告シ司法大臣ハ其試補ヲ免スルコトアルヘシ

### 第五 第二回試験

第二回試験ハ試補カ事務修習シテ事實ノ認定法律ノ適用ヲ爲シ得ル能力ヲ考試スルモノニシテ其試験ハ筆記口述ノ二様ナリ

試験委員ハ試補ニ筆記試験ノ爲メ二件以上ノ訴訟記録ヲ付與シ受験者ハ其付與セラレタル訴訟記録ニ就キ事實及ヒ理由ヲ評示シタル判決案ヲ答案トシテ試験委員長ノ定メタル日時内ニ之ヲ差出スヘキモノニシテ口述試験ノ方法ハ試験委員長之ヲ定ムルナリ  
試補ニシテ第二回試験ニ及第セサル場合ハ更ニ六ヶ月間修習ヲ爲シタル後試験ヲ受ク



ルコトヲ得ヘシ

第二回試験施行ノ場所ハ司法省ニシテ志願者ハ願書ヲ司法大臣ニ差出シ司法大臣ハ第二回試験ヲ受クヘキ試験補ノ氏名ヲ試験委員長ニ通知シ試験ヲ行ハシム

### 第五章 合格者ノ就職

判事検事登用第一回試験ニ及第シテ司法官試補タリシ者ハ直チニ辭シテ辯護士タルコトヲ得ルヲ以テ當初ヨリ辯護士タルコトヲ唯一ノ志望トスル人ト雖モ亦判事検事登用第一回試験ヲ受クルハ利ナシトセス或ル年代ニ於テハ判事検事試験ト辯護士試験トヲ合一シテ同一問題ニ付キ同日時ニ施行セラレタル爲メ同時期ニ於テ此二試験ヲ受クルノ便宜ナカリシト雖モ近來此例ヲ廢シ判事検事試験ト日ヲ異ニシテ引續キ別問題ニ就キ辯護士試験ヲ舉行セラルルニ至リシハ受験者ノ爲メニ大ナル好都合ナリトス而モ二兎ヲ追フテ終ニ一兎ヲモ獲サルカ如キ悔ナキニシモ非ス然レハ此二試験ヲ受クル者ハ前後ニ輕重ナク最善ノ努力ヲ爲スヘキナリ

又判事検事試験ニ於テ第一回試験及ヒ第二回試験ノ成績ノ良否ハ任官後ノ進退ニ影響

スルコト勿論ナリ中央若クハ地方重要ノ裁判所ニ就職セントスルモ任地ノ志望ハ大體成績順ニ依リテ先ツ考量セラルルカ故ニ此點モ亦注意セサルヘカラス

判事ノ職ト検事ノ職トノ間ニハ輕重ナシト雖モ而モ人々ノ性格ニ依リテ適否ナキニ非ス第二回試験ニ當リテハ受験者ニ於テ其何レヲ志望スルヤヲ申告セサルヘカラス此志望ハ重大ナル事故ナキ限り當局ニ於テモ之ヲ尊重セラルルノ實例タリ

第二回試験ニ及第シタル者ハ各其志望ニ從ヒ判事若クハ検事トシテ任官セラルト雖モ直チニ補職セラルルコトナク先ツ豫備判事若クハ豫備検事トシテ各地ノ地方裁判所詰ヲ命セラル豫備判事、豫備検事ハ其職務ハ本職ト同一ニシテ何等差異アルコトナク唯本俸ヲ給與セラレスシテ特別ノ俸給令ニ依リ八百圓以内ノ年俸ヲ給與セラルルモノトス而シテ本職ニ缺員ヲ生スルトキハ大體第二回試験ノ成績順ニ依リテ本職ニ補セラレ茲ニ始メテ本俸ノ支給ヲ受クルニ至ル如ク第二回試験ノ成績ハ終始榮進ノ速度ヲ支配スルモノナレハ受験者タル者ハ充分ノ奮勵ヲ要スルコト言フ埃タス



### 第六章 關係法規

#### ◎裁判所構成法(摘録)

##### 第二編 裁判所及検事局ノ官吏

##### 第一章 判事又ハ検事ニ任セラルルニ必要ナル準備及資格

第五十七條 判事又ハ検事ニ任セラルルニハ第六十五條ニ定メタル者ヲ除ク外試補トシテ一年六月以上裁判所及検事局ニ於テ實務ノ修習ヲ爲シ且考試ヲ經ルコトヲ要ス  
實務ノ修習及考試ニ關スル細則ハ司法大臣之ヲ定ム

第五十八條 試補ハ成規ノ試験ニ合格シタル者ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス  
前項ノ試験ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

##### 第五十九條 (削除)

第六十條 一年以上修習ヲ爲シタル試補ハ其ノ修習ヲ現ニ監督スル判事ノ命アルトキ  
區裁判所ニ於テ或ル司法事務ヲ取扱フコトヲ得

豫審判事及地方裁判所ノ受命判事モ亦其ノ附屬ノ試補ヲシテ自己ニ代リ或ル事務ヲ

取扱ハシムルコトヲ得

第六十一條 試補ハ如何ナル場合ニ於テモ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有セス

第一 訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

第二 證據ヲ調フル事但シ前條第二項ノ場合ヲ除ク

第三 登記ヲ爲ス事

第六十二條 司法大臣ハ試補ノ行狀其ノ地位ニ適セス又ハ修習ノ成績考試ニ合格スヘ  
キ見込ナシト認ムルトキハ之ヲ罷免スルコトヲ得

第六十三條 新任ノ判事又ハ検事ハ闕位アルトキ之ヲ區裁判所若クハ地方裁判所ノ判  
事又ハ區裁判所若クハ地方裁判所ノ検事局ノ検事ニ補ス

司法大臣ハ闕位アルマテ新任ノ判事又ハ検事ニ豫備判事又ハ豫備検事トシテ勤務ス  
ルコトヲ命シ之ヲ司法省又ハ區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ裁判所ノ検事局ニ用  
ウ

第六十四條 區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ検事局ニ用キラレタル豫備判事又ハ豫  
備検事ハ判事又ハ検事差支アリテ職務ニ従事スルコトヲ得ス且通常代理ノ規程ニ依



リ難キコトアルトキハ第三十二條ノ制限ニ從ヒ司法大臣ハ之ニ其ノ判事又ハ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

司法大臣ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ其ノ檢事局ノ檢事ニ一時闕位アル間ハ此ノ法律ノ範圍内ニ於テ豫備判事又ハ豫備檢事ヲ以テ之ヲ充タスコトヲ得

第六十五條 三年以上帝國大學法科教授若クハ辯護士タル者ハ此ノ章ニ掲ケタル試験及考試ヲ經スシテ判事又ハ檢事ニ任セラルルコトヲ得

第六十六條 左ニ掲ケタル者ハ判事又ハ檢事ニ任セラルルコトヲ得ス

第一 重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第二章 判事

第六十七條 判事ハ終身官トシ親任勅任又ハ奏任トス

第六十八條 大審院長ハ親任判事ヲ以テ之ヲ親補ス

控訴院長及大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任判事ノ中ヨリ之ヲ補シ其ノ他

ノ判事ノ職ハ勅任判事又ハ奏任判事ノ中ヨリ司法大臣之ヲ補ス

第六十九條 五年以上判事タル者又ハ五年以上檢事帝國大學法科教授若クハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ控訴院判事ニ補セラルルコトヲ得ス

第七十條 十年以上判事タル者又ハ十年以上檢事帝國大學法科教授若クハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ大審院判事ニ補セラルルコトヲ得ス

第七十一條 第六十九條及第七十條ニ掲ケタル年限ヲ算フルニハ補職ノ時マテ各々其ノ條ニ列記シタル職務ノ一ノミニ引續キ從事シタルコトヲ必要トセス

第七十二條 判事ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

第一 公然政事ニ關係スル事

第二 政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ府縣郡市町村ノ議會ノ議員トナル事

第三 俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就ク事

第四 商業ヲ營ミ又ハ其ノ他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ム事

第七十三條 第七十四條乃至第七十五條ノ場合ヲ除ク外判事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ轉官轉所停職免職又ハ減俸セララルコトナシ



但シ豫備判事タルトキ及補闕ノ必要ナル場合ニ於テ轉所ヲ命セラルルハ此ノ限ニ在ラス

前項ハ懲戒取調又ハ刑事訴追ノ始若クハ其ノ間ニ於テ法律ノ許ス停職ニ關係アルコトナシ

第七十四條 判事身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

第七十四條ノ二 司法大臣ハ裁判事務上必要アルトキハ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ニ依リ判事ニ轉所ヲ命スルコトヲ得

第七十五條 法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ又ハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ其ノ判事ヲ補スヘキ闕位ナキトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ給シテ闕位ヲ待タシムルノ權ヲ有ス

第七十六條 判事ノ官等俸給及進級ニ關スル規程ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第七十七條 判事ハ退職シタルトキハ恩給法ニ依リ恩給ヲ受ク

第七十八條 判事ノ俸給ハ判事ニ對シ懲戒取調又ハ刑事訴追ヲ始メタルカ故ニ停職シ

タルニ拘ラス引續キ之ヲ給ス

第三章 檢事

第七十九條 檢事ハ勅任又ハ奏任トス

第七十六條及第七十七條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

檢事總長ハ勅任檢事ヲ以テ之ヲ親補ス

檢事長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任檢事ノ中ヨリ之ヲ補シ其ノ他ノ檢事ノ職ハ勅任

檢事又ハ奏任檢事ノ中ヨリ司法大臣之ヲ補ス

第八十條 檢事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ之ヲ免

職スルコトナシ

第八十一條 檢事ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ判事ノ裁判事務ニ干涉シ又ハ裁判事務

ヲ取扱フコトヲ得ス

第八十二條 檢事ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

第八十三條 檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ各管轄區域内ノ裁判所ノ檢事ノ職務ノ範

圍内ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フノ權ヲ有ス



檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ管轄區域内ニ於テ或ル檢事ノ取扱フヘキ事務ヲ他ノ檢事ニ移スノ權ヲ有ス

**第八十四條** 司法警察官ハ檢事ノ職務上其ノ檢事局管轄區域内ニ於テ發シタル命令及其ノ檢事ノ上官ノ發シタル命令ニ從フ

司法省又ハ檢事局及内務省又ハ地方官廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域内ニ於テ司法警察官トシテ勤務シ前項ノ命令ヲ受ケ及之ヲ執行スル者ヲ定ム

### ◎判事檢事登用試験規則

#### 第一章 試験委員

**第一條** 判事檢事登用試験委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

**第二條** 判事檢事登用第一回試験委員長及委員ハ司法省高等官及大審院控訴院ノ判事檢事中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス但必要アルトキハ他ノ官廳高等官ニ試験委員ヲ囑託スルコトアルヘシ

判事檢事登用第二回試験委員長ハ司法次官ヲ以テ之ニ充テ試験委員ハ常任ヲ三名ト

シ司法省高等官及大審院控訴院ノ判事檢事中ヨリ司法大臣之ヲ命ス其他ノ委員ハ司法省高等官大審院控訴院ノ判事檢事中ヨリ臨時司法大臣之ヲ命ス

試験委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

**第三條** 判事檢事登用試験委員長ハ委員ヲ監督シ試験ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス試験委員長ニ關員又ハ事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

**第四條** 判事檢事登用試験委員長及委員ニハ二百圓以内ノ手當ヲ給シ試験委員附屬ノ書記ニハ三十圓以内ノ手當ヲ給ス

#### 第二章 受驗資格

**第五條** 判事檢事登用試験ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ左ニ記載シタル者ニ限ル

一 官立學校及専門學校令ニ依ル公立又ハ私立ノ學校（別科ヲ除ク）ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

二 司法大臣ニ於テ指定シタル公立又ハ私立ノ學校ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者



三 司法大臣ニ於テ相當ト認メタル外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

前項第二號ハ明治四十年七月三十一日以後卒業スル者ニハ之ヲ適用セス

第六條 裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第三章 第一回試験

第七條 第一回試験ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試験ノ期日ハ試験委員之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第八條 試験志願者ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試験委員長ニ差出スヘシ

一 履歷書

二 身分年齢及兵役ニ關スル證明書

三 第五條ニ定メタル要件ノ證明書

試験志願者ハ試験手数料トシテ金十圓ヲ納ムヘシ但其手数料ハ「登記印紙」ヲ用キ之ヲ志願書ニ貼付スヘシ

手数料ハ志願書ヲ取下ケ又ハ試験ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還付セス

第八條ノ二 試験ヲ分チテ豫備試験及本試験トシ尙身體検査ヲ行フ

第八條ノ三 豫備試験ハ受験者ノ本試験ヲ受クルニ相當ナル普通ノ學識ヲ試験スルヲ以テ目的トス

第八條ノ四 豫備試験ハ左ノ科目ニ付之ヲ施行ス

一 論文

二 外國語

外國語ハ英語、佛語及獨語ノ中ニ就キ一種ヲ選ハシム

第八條ノ五 試験委員豫備試験ノ答案ヲ調査シタル後本試験ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ本試験ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第八條ノ六 豫備試験ノ方法ハ試験委員長之ヲ定ム

第九條 本試験ハ受験者ノ専門ノ學識ヲ試験スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二様トス  
第十條 筆記試験ハ憲法、民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、行政法、國際公法、國際私法ノ各科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十一條 試験委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試験ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタ



ルトキハ口述試験及身體検査ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第十二條 口述試験ハ民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條 受験者ノ及第落第及及第者優劣ハ筆記試験口述試験ノ成績ニ對スル委員過半数ノ意見ニ從テ之ヲ決ス及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

第十四條 志願者口述試験又ハ身體検査ニ闕席シタルトキハ試験ハ成立サルモノトス身體検査ニ合格セサル者ハ前二項ノ規定ニ拘ラス落第トス

第十五條 試験委員長ハ及第者ノ氏名及其試験ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十六條 帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

#### 第四章 實地修習

第十七條 試補ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ一名若クハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條 修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲シ檢事ノ事務ヲ修習スルト

キハ檢事正之ヲ爲ス

裁判所長若クハ檢事正ハ每年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀並執務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作り控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條 試補ハ修習目錄ヲ作り其取扱タル事件ヲ記載スヘシ

此目錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閲ヲ受クヘシ

第二十條 試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一年六箇月間二箇月以內ハ修習日數ニ算入ス

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一年六箇月間一箇月以內亦同シ

第一項第二項ノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以內ニ非サレハ算入スルコトヲ得

第二十一條 試補ノ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若クハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲナシタルコトヲ試補ノ履歷ニ記入スヘシ

第二十二條 試補職務上若クハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニシテ第二回試験ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長



検事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ  
司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ

第五章 第二回試験

第二十三條 第二回試験ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ  
試験ノ期日ハ試験委員長之ヲ定ム

第二十四條 試補第二回試験ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習目錄ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條 司法大臣ハ第二回試験ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試験委員長ニ通知シ試験ヲ行ハシム

第二十六條 第二回試験ハ受験者ノ實務ニ習熟シタルヤ否ヲ試験スルヲ以テ主タル目的トス筆記口述ノ二様トス

第二十七條 試験委員ハ試補ニ筆記試験ノ爲メ二件以上ノ訴訟記録ヲ付與スヘシ

第二十八條 受験者ハ付與セラレタル訴訟記録ニ就キ事實及理由ヲ詳示シタル判決案ヲ答案トシテ差出スヘシ

答案ハ試験委員長ノ定メタル日時内ニ之ヲ差出スヘシ若シ之ニ違ヒタルトキハ試験ハ成立タサルモノトス

第二十九條 口述試験ノ方法ハ委員長之ヲ定ム

第三十條 試補第二回試験ニ及第セサル場合ニ於テハ更ニ六箇月間修習ヲ爲シタル後試験ヲ受クルコトヲ得

第三十一條 試補第二回試験ノ成立タサル場合ニ於テハ司法大臣ノ相當ト認ムル時期ニ於テ更ニ試験ヲ受クルコトヲ得

第三十二條 第一回試験ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五條ノ規程ハ第二回試験ニモ亦之ヲ適用ス

◎判事檢事登用試験ノ豫備試験ニ關スル件

大正二年四月司法省令第十三號



判事検事登用試験規則及辯護士試験規則ニ於ケル豫備試験ハ當分ノ内之ヲ行ハス

◎判事検事登用試験規則第五條ニ依ル指定學校

判事検事登用試験規則第五條ニ依リ司法大臣ノ指定シタル私立學校左ノ如シ

- 私立日本大學
- 私立中央大學
- 私立早稻田大學
- 私立明治大學
- 慶應義塾
- 私立法政大學
- 立命館大學(京都法政大學)
- 關西大學
- 獨逸學協會學校

第四編 辯護士試験

第一章 辯護士ノ地位

今ヤ我國ハ法治國トシテ吾人ノ享有スヘキ權利ノ範圍ハ一ニ法ノ定ムル所タリト雖モ社會ノ進歩ト共ニ各人ノ業務ハ頗ル繁忙ヲ來シ専門家ニアラスンハ凡百ノ法規ヲ熟知スル能ハス法ニ通曉セサレハトテ其適用ヲ拒ムヲ得サルヲ以テ吾人ニ代リテ其權利ヲ伸張シ又ハ防衛スルノ機關無クンハ法律ノ與ヘタル各人ノ權利ハ遂ニ有名無實タルニ至ル場合ヲ生スヘシ之レ辯護士ノ必要ナル所以ナリ

辯護士ハ民事ノ訴訟ニ於テハ輔佐人又ハ訴訟代理人トシテ民事訴訟ニ干與シ刑事ニ於テハ辯護人トシテ刑事訴訟ニ干與スルナリ其民事ニ於ケル輔佐人タルトキハ當事者トシテ口頭辯論ニ於テ原告若クハ被告ヲ輔佐シテ其權利ヲ伸張シ又ハ防衛シ訴訟代理人トシテ行動スルトキハ法規ニ依リ當事者本人ニ其效力ヲ及ホスヘキ訴訟行為ヲナスニ在リ

輔佐人及ヒ訴訟代理人ハ必スシモ辯護士ニ限ルモノニアラサルモ辯護士以外ノ者ハ多



ク訴訟手續ニ通曉セス且ツ諸種ノ弊害之ニ伴フニ因リ大ナル制限ヲ設ケ法律ハ寧ロ辯護士ヲシテ之ニ當ラシメンコトヲ期セリ世人或ハ吾人カ法治ノ制ニ慣レ其智識發達スルニ至ラハ辯護士ノ必要減スヘシト想像スル者アルヘシト雖モ社會ノ進歩ニ伴ヒ各般ノ業務ハ益々分業的ニ進ミ熟達セル智識ト敏活ナル手腕ヲ揮ヒテ訴訟行爲ヲ爲ス者ニ勝訴ノ結果ヲ來タスヘキヲ以テ愈々辯護士ノ必要ヲ増スニ至ルヘシ刑事訴訟ニ於テハ辯護人ハ被告人ノ機關ニモアラス又代理人ニモアラル訴訟法上獨立ノ人格者トシテ行動スルモノニシテ其職務ハ被告人ニ對スル檢事ノ不當ナル攻撃ヲ防禦シ其不當ノ攻撃カ目的ヲ達スルヲ妨クルニ在ルカ故ニ檢事ノ論告正當ナルトキハ辯護人ハ何等ノ辯論ヲ爲ササルモ其職務ヲ盡シタルモノト謂フヘシ

夫レ上述ノ如ク辯護士ノ職務ハ民事刑事兩訴訟ニ於テ異ナリト雖モ要スルニ吾人ノ權利ヲ伸張防禦シ其享有セル權利ヲ擁護スルニ在リ斯克ノ如ク辯護士ノ職タル社會ノ進歩ト共ニ必要欠クヘカラサルモノナリト雖モ現時世人之ヲ厭フノ傾向アルハ之レ辯護士ノ職務其者カ世人ノ忌避ヲ受クル性質ノモノタルニアラスシテ其職位ヲ濫用スルヨリ生スル自業自得ノ所謂吾カ身ヨリ生シタル鎗ナレハ苟モ名ヲ辯護士名簿ニ登録セル

者ハ挺身其職務ニ忠實ニシテ且ツ其社會ノ廓清ヲ期シ以テ世人ノ誤解ヲ釋クト共ニ其天職ノ光輝ヲ發揮セスンハアルヘカラス

## 第二章 辯護士ノ資格

辯護士ハ上述ノ如ク當事者ノ爲メニ權利ノ伸張防禦ノ職務ヲ完フスルカ爲メニ設ケラレタル機關ニシテ當事者之ニヨリテ能ク自己ノ冤罪ヲ免カレ又法律ニ依リテ保護セララル權利ヲ完全ニ實行シ得ヘク又自己ノ權利ヲ蹂躪セラレサルヲ得ルナリ從テ國家ハ此等ノ職務ヲ完フシ得ヘキモノノ能力ヲ制限シ法定ノ資格ヲ具フルモノニ限リテ其職業ヲ營ムヲ得ヘキモノトセリ然シテ其一ハ當事者ノ權利ノ伸張防禦ヲ完全ナラシムルト共ニ所謂三百代言人カ訴訟事務ヲ取扱フノ弊害ヲ防止スルニ在リトス而シテ其辯護士タルノ資格ハ辯護士法ナル法律ノ定ムル所ニ依レハ

- 一 日本臣民ニシテ民法上ノ行爲力ヲ有スル成年以上ノ男子タルコト
- 二 辯護士試験規則ニヨリ試験ニ及第シタルモノ
- 三 判事檢事タル資格ヲ有スルモノ



四 法律學ヲ修メタル法學博士帝國大學法律科卒業生舊東京大學法學部卒業生司法省舊法學校正則部卒業生及司法官試補タリシモノ

辯護士タルニハ上述ノ積極的條件ヲ有スルノミナラス左ニ掲ケタルモノ亦辯護士タルヲ得サルノ消極的條件ヲ必要トセリ

第一 重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタルトキハ此限リニアラス

第二 不敬罪、偽造罪、偽證罪、賄賂罪、誣告罪、竊盜罪、詐欺取財罪、費消罪、

贓物ニ關スル罪、遺失物埋藏物ニ關スル罪、家資分散ニ關スル罪及ヒ舊刑法第百

七十五條同第二百六十條同第二百八十二條同第二百八十六條同第二百八十七條同

第三百六十條ニ記載シタル定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 公權停止中ノ者

第四 破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

### 第三章 辯護士ノ職務

辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判所ノ命令ニ依ル強制辯護ニヨリテ通常裁判所ニ於テ法律ニ定メタル職務ヲ行フモノニシテ其法律ニ定メタル職務トハ刑事辯護ノ場合ハ公益ノ維持ト刑事被告人ノ輔佐人トシテ其犯罪事件ニ關シテ事實上及法律上ノ辯護ヲ爲シ民事ニ於テハ當事者ノ訴訟委任ニヨリ訴訟代理人トシテ又ハ輔佐人トシテ當事者ニ代リ之カ爲メニ訴訟行爲ヲナシ又ハ當事者及其法定代理人ト共ニ法廷ニ立チテ其權利ノ伸張又ハ防禦ヲ爲シテ當事者タル原告被告ヲ補助スルニ在リ而シテ其辯護士カ當事者ノ委任ニヨリ又ハ裁判所ノ命令ニヨリテ上述ノ公務ヲ行フニハ辯護士名簿ニ登錄セラレ且ツ辯護士會ニ加入シタル後其辯護士會ノ定ムル規則ニ從ヒ當事者ノ利益ニ適合スヘキヲ努メサルヘカラス是レ即チ辯護士ノ職務上忠實ナルヲ要スル國家ニ對スル義務ナリ而シテ其忠實ノ義務ヨリ生スル效果ハ之ヲ積極的效果ト消極的效果トニ區別スルヲ得ヘシ前者ハ努メテ當事者ノ利益ニ適合スヘキ行爲ヲ爲スニ在リテ其後者即チ消極的ノ效果ハ國家又ハ當事者ノ不利益ヲ來スヘキ行爲ヲ避クルニ在リ而シテ其積極的ノ效果ハ一定ノ法則ヲ定ムルヲ得サルモ消極的効果ハ法律之カ規定ヲ爲セリ即チ秘密ヲ守ルノ義務及ヒ左記ノ如キ行爲ヲ爲ササルノ義務ナリ



- 一 辯護士ハ報酬アル公務ヲ兼ヌルコトヲ得ス但シ帝國議會議員府縣會常置委員ト爲リ又ハ官廳ヨリ特ニ命セラレタル職務ヲ行フハ此限リニアラス
- 二 辯護士ハ商業ヲ營ムヲ得ス但シ辯護士會ノ許可ヲ得タルモノハ此限リニアラス

#### 第四章 辯護士試験手續

辯護士試験ハ其受験資格ニ於テ法律學校ニ三ケ年間在學シテ卒業證書ヲ有スルコト中學校卒業生タルノ要件ヲ除クノ外其試験委員試験科目モ判事檢事試験ト同一ナルヲ以テ從テ其準備方法ニ於テモ之ト異ナル所ナキカ故ニ強テ之カ説明ヲ爲サンカ前者ト重複説述スルノ外ナキヲ以テ茲ニ之ヲ省略シ總テ判事檢事試験ニ就テ參照セラレンコトヲ希望ス

唯茲ニ一言スルコトヲ要スルハ受験資格ノ問題ナリ判事檢事試験ニ在リテハ同試験規則第五條ニ於テ「成年以上ノ男子ニシテ」トノ規定ヲ存スルカ爲メニ成年以上ノ男子ニ非サレハ判事檢事試験ヲ受クルコトヲ得スト雖モ辯護士試験規則ニ於テハ受験年齢ニ就テ何等ノ制限ヲ設クルコトナキヲ以テ成年ニ達セサル者ト雖モ試験ヲ受クルニ妨

ケ無シ然レトモ辯護士タルノ必要資格トシテハ辯護士法第二條第一號ニ於テ「日本臣民ニシテ民法上ノ能力ヲ有スル成年以上ノ男子タルコト」ト規定セラルルカ故ニ未成年者ハ縦令試験ニ及第スルモ直チニ登録ヲ受ケテ辯護士ノ職務ニ従事スルコトヲ得ス其成年ニ達シタル時ニ於テ始メテ登録ヲ受クルコトヲ得ヘキナリ



### 第五章 關係法規

#### ◎辯護士法(摘錄)

##### 第一章 辯護士ノ資格及職務

第一條 辯護士ハ當事者ノ委任ヲ受ケ又ハ裁判所ノ命令ニ從ヒ通常裁判所ニ於テ法律ニ定メタル職務ヲ行フモノトス但シ特別法ニ因リ特別裁判所ニ於テ其ノ職務ヲ行フコトヲ妨ケス

第二條 辯護士タラムト欲スル者ハ左ノ條件ヲ具フルコトヲ要ス

第一 日本臣民ニシテ民法上ノ能力ヲ有スル成年以上ノ男子タルコト

第二 辯護士試験規則ニ依リ試験ニ及第シタルコト

第三條 辯護士試験ニ關スル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第四條 左ニ掲クル者ハ試験ヲ要セスシテ辯護士タルコトヲ得

第一 判事檢事タル資格ヲ有スル者又ハ辯護士ニシテ其ノ請求ニ因リ登録ヲ取消シタル者

第二 法律學ヲ修メタル法學博士、帝國大學法律科卒業生、舊東京大學法學部卒業生、司法省舊法學校正則部卒業生及司法官試補タシリ者

第五條 左ニ掲クル者ハ辯護士タルコトヲ得ス

第一 重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二 不敬罪、偽造罪、偽證罪、賄賂罪、誣告罪、竊盜罪、詐欺取財罪、費消罪、

贓物ニ關スル罪、遺失物埋藏物ニ關スル罪、家資分散ニ關スル罪及刑法(舊)第七百七十五條同第二百六十條同第二百八十二條同第二百八十六條同第二百八十七條同第三百六十條ニ記載シタル定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 公權停止中ノ者

第四 破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

第六條 辯護士ハ報酬アル公務ヲ兼ヌルコトヲ得ス但シ帝國議會議員、府縣會常置委員ト爲リ又ハ官廳ヨリ特ニ命セラレタル職務ヲ行フハ此ノ限ニ在ラス  
辯護士ハ商業ヲ營ムコトヲ得ス但シ辯護士會ノ許可ヲ得タルモノハ此ノ限ニ在ラス



◎辯護士試験規則

- 第一條 辯護士試験ハ毎年一回之ヲ行フ但其期日ハ司法大臣之ヲ定メ三箇月前官報ヲ以テ之ヲ公告ス
- 第二條 試験委員長及委員ハ判事檢察司法省高等官ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス但必要アルトキハ他ノ官廳高等官ニ試験委員ヲ囑託スルコトアルヘシ
- 試験委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス
- 第三條 試験委員長ハ委員ヲ監督シ試験ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス
- 第四條 試験委員長及委員ニハ二百圓以内ノ手當ヲ給シ試験委員附屬ノ書記ニハ三十圓以内ノ手當ヲ給ス
- 第五條 辯護士法第五條ニ該當スル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス
- 第六條 試験志願者ハ其願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ試験ヲ受クヘキ裁判所ノ檢事局ヲ經由シテ之ヲ試験委員長ニ差出ス可シ

一 履歷書

- 二 辯護士法第五條第一號但書及ヒ第四號ニ該ル者ハ其復權又ハ債務ノ辨償ヲ終ヘタル證明書

第七條 試験志願者ハ試験手数料トシテ金十圓ヲ納ム可シ但シ其手数料ハ〔登記印紙〕ヲ用キ之ヲ願書ニ貼付スヘシ

手数料ハ願書ヲ取下ケ又ハ試験ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還付セス

第七條ノ二 試験ヲ分チテ豫備試験及本試験トシ尙身體検査ヲ行フ

豫備試験ニ合格シタル者ニ非サレハ本試験ヲ行ハス

身體検査ニ合格セサル者ハ落第トス

第七條ノ三 豫備試験ハ受験者ノ本試験ヲ受クルニ相當ナル普通ノ學識ヲ試験スルヲ以テ目的トス

第七條ノ四 豫備試験ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ施行ス

一 論 文

二 外國語



外國語ハ英語、佛語及獨語ノ中ニ就キ一種ヲ選ハシム

第七條ノ五 豫備試験ノ方法ハ試験委員長之ヲ定ム

第八條 本試験ハ受験者ノ専門ノ學識ヲ試験スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二様トス  
筆記試験ハ憲法、民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、行政法、國際公法、  
國際私法ノ各科目ニ就キ之ヲ施行ス

口述試験ハ民法、商法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ  
之ヲ施行ス

第九條 試験ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ

第十條 筆記試験ニ合格シタル者ニ非サレハ口述試験ヲ行ハス

第十一條 試験ニ關スル細則ハ試験舉行毎ニ試験委員ニ於テ之ヲ定ム可シ

第十二條 試験委員長ハ試験ノ成績及ヒ及第者ノ氏名ヲ司法大臣ニ報告ス可シ

第十三條 試験及第者ノ氏名ハ官報ヲ以テ公告ス

第十四條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第十五條 試験願書及履歷書ノ書式ハ左ノ如シ

書式

試験願書(用紙美濃紙)

族籍

氏

名

何年何箇月

私儀辯護士志願ニ付試験相受度別紙履歷書及證明書相添此段奉願候也

現住所

氏

名

Ⓞ

年月日

辯護士試験委員長氏名殿

履歷書(用紙美濃紙)

族籍

氏

名

出生年月日



受験提要

一一二

學事

- 一何年何月ヨリ何地何某ニ就キ又ハ何學校ニ入り何年何月迄何學ヲ修メ又ハ何學科ヲ卒業スルノ類
- 一何年何月ヨリ何官立學校ニ入り何學科ヲ修業シ何年何月卒業ス其證書寫別紙ノ如シノ類
- 一何年何月何學校若クハ其他ニ於テ何々ノ試験ヲ受ケ及第ス其證書寫別紙ノ如シノ類

職業

- 一何年何月ヨリ何年何月迄何會社ノ役員トナリ又ハ何學校教員若クハ官廳何官ト爲リタルノ類

賞罰

- 一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ノ爲メ何廳ヨリ賞ヲ受ケ何年何月何々ノ事由ノ爲メ何地ニ於テ罰又ハ刑ヲ受ク其辭令書又ハ宣告書寫別紙ノ如シノ類
- 右ノ各項中記載スヘキ廉ナキ者ハ其旨ヲ記載ス可シ

現住所

年月日

氏

名 ㊦

◎辯護士試験ノ豫備試験ニ關スル件

大正二年四月司法省令第十三號

判事檢事登用試験規則及辯護士試験規則ニ於ケル豫備試験ハ當分ノ内之ヲ行ハス



## 附録 重要参考書

### 第一 試験準備書

◎學理的排列高官文官  
外交官判事檢察事務士  
各官私立諸大學 試験問題集

巖松堂書店編纂

右ハ明治三十五年度以降ノ各試験問題ヲ各部ニ編別シテ學理的ニ分類彙集シタルモノニシテ大體各科ヲ通シテ問題ト爲ルヘキ諸點ヲ推量スルニ易カラシメ且ツ試験準備ノ答案練習ノ爲メニ好個ノ指針タルヘシ



第三 行政法

- 日本行政法 美濃部 達吉 著
- 行政法原理 市村 光惠 著
- 行政法總論 島村 他三郎 著
- 行政法各論 島村 他三郎 著
- 行政法講義 織田 萬 著
- 國法學行政篇 清水 澄 著
- 第二編行政義錄 末松 偕一郎 著
- 行政法講義錄 箕 克彦 著
- 行政法講義錄 阿部 壽準 著
- 行政法理研究書 法曹 閣 編

第四 刑法

- 刑法總論 大場 茂馬 著
- 刑法各論 大場 茂馬 著

- 刑法要論 勝本 勘三郎 著
- 刑法通義 牧野 英一 著
- 日本刑法 牧野 英一 著
- 日本刑法論 泉 二新 熊 著
- 刑法原理 山岡 萬之助 著
- 刑法原論 岡田 庄 作 著
- 刑法總論講義錄 谷 野 格 著
- 刑法總論講義錄 宮 本 英 修 著
- 刑法總論講義錄 牧 野 英 一 著
- 法學論文集(刑) 明治大學出版部編

第五 民法

- (甲) 民法全編
  - 民法要論 飯島 喬平 著
  - 民法要義 梅 謙次郎 著
  - 民法要論講義錄 鈴木 喜三郎 著
  - 私法論文集 松本 喬治 著
  - 民法研究 石坂 音四郎 著
  - 法學論文集(民) 明治大學出版部編
- (乙) 總則編
  - 民法原論第一卷 富井 政章 著
  - 民法全書第一卷 松本 烝治 著
  - 民法全書第二卷 鳩山 秀夫 著
  - 民法釋義第一卷 中島 玉吉 著
  - 民法總論 嘉山 幹一 著
  - 民法總論 鳩山 一郎 著
  - 民法論總則 松岡 義正 著
  - 民法總論 平沼 騏一郎 著



◎日本民法總論

(丙)

川名兼四郎著

◎民法原論第二卷

富井政章著

◎民法全書第四卷

三瀨信之著

◎物權法

橫田秀雄著

◎物權法論

橫田秀雄著

◎物權法要論

霜山精一著

(丁)

債權編

◎日本民法第三編

石坂音四郎著

◎債權總論

橫田秀雄著

◎債權各論

橫田秀雄著

◎債權法要論

川名兼四郎著

◎日本債權法

鳩山秀夫著

◎民法理由第三卷

岡松參太郎著

◎債權法總論

橫田秀雄著

◎債權法各論

橫田秀雄著

◎權利質論

神戶寅次郎著

◎擔保物權法

三瀨信之著

◎民法釋義第二卷

中島玉吉著

◎民法論物權

松岡義正著

◎物權法講義錄

飯田喬平述

◎債權各論

清瀬一郎著

◎債權各論

村上恭一著

◎損害賠償論

團野新之著

◎民法全書第八卷

神戶寅次郎著

◎債權總論講義錄

須賀喜三郎著

◎契約總論講義錄

飯島喬平述

◎債權各論講義錄

末弘嚴太郎述

(戊)

親族相續編

◎親族相續法論

仁井田益太郎著

◎日本親族法論

牧野菊之助著

◎日本相族法論

牧野菊之助著

◎民法親族法論

奧田義人著

◎民法相續總論

奧田義人著

◎親族法要論

牧野菊之助著

◎相續法要論

柳川勝二著

◎親族法講義錄

島田鐵吉述

◎相續法講義錄

島田鐵吉述

◎第六 商法

(甲)

商法全編

◎商法論綱

柳川勝二著

◎松波日本商法私論

松波仁一郎著

◎商法改正法評論

松本丞治著

(乙)

總則編

◎商法總則論

片山義勝著

◎商法原論總則

松本丞治著

◎商法總論

竹田省著

◎新商法釋義

青木徹二著

◎商法通義

矢部孫克己著

◎私法論文集

松本丞治著

◎商法總論

志田御太郎著

◎商法總論

青山衆司著

◎商法總論

西本辰之助著



# 欠

◎商法總則講義錄	◎會社法講義	◎會社法原論	◎商行爲法	◎保險法	◎日本商行爲法	◎保險法論	◎保險法論	◎保險法論	◎日本手法論	◎手法論	◎手法論	◎手法論
飯島喬平述	會社編	松本治著	片山勝著	商行爲編	松本治著	松本治著	松本治著	松本治著	松本治著	松本治著	松本治著	松本治著
◎日本會社法	◎保險法講義錄	◎商行爲法講義錄	◎保險法論義錄	◎商行爲論講義錄	◎商行爲法講義錄	◎商行爲法講義錄	◎商行爲法講義錄	◎商行爲法講義錄	◎手法法講義錄	◎商法手法講義錄	◎手法法講義錄	◎手法法講義錄
松波仁一著	青山衆司著	松波仁一著	松波仁一著	須賀喜三著	飯島喬平述	三橋久美述	松本治述	青木徹二述	松波仁一述	松波仁一述	松波仁一述	松波仁一述



# 欠

## 第十四 商業史

- ◎日本商業史要 橫井時冬著 三上毅譯
- ◎日本商業史 菅沼定風著 平沼叔郎述
- ◎近世世界商業史 三上毅著
- ◎商業史講義錄 三上毅著

## 第十五 政治學及政治史

- ◎政治學大綱 小野塚喜平次著 浮田和民述
- ◎政治學 佐藤丑次郎著 酒井雄三郎著
- ◎政治原論講義錄 浮田和民述
- ◎十九世紀歐洲政治史論 酒井雄三郎著

## 第十六 外交史

- ◎最近世界外交史 長岡春一著 酒井雄三郎譯
- ◎近世外交史 有賀長雄著 林毅陸著
- ◎歐洲近世外交史 酒井雄三郎譯
- ◎歐洲近世外交史 林毅陸著

## 第十七 判決例

- ◎大審院民要旨類集 中央大學編 判決例要錄
- ◎大審院刑要旨類集 中央大學編 民法判決實例
- ◎大審院刑要旨類集 中央大學編 法律新聞社編
- ◎大審院刑要旨類集 中央大學編 巖松堂書店編

附錄 重要參考書 第十二 財政學 第十三 商業學 第十四 商業史 第十五 政治學及政治史 第十六 外交史 第十七 判決例 一二五



- ◎商法判決實例 巖松堂書店編
- ◎刑法判決實例 巖松堂書店編
- ◎大審判決錄(雜) 中央大學編
- ◎院判例(雜) 巖松堂書店編

### 第十八雜誌

- ◎法學協會雜誌
- ◎京都法學會雜誌
- ◎法學新報
- ◎法律評論
- ◎法學志林
- ◎國家學會雜誌
- ◎國民經濟雜誌
- ◎經濟論叢
- ◎國際外交雜誌
- ◎外交時報

文官高等外交官  
判事檢事辯護士  
受驗提要(終)

大正五年十二月二十日印刷  
大正五年十二月廿五日發行

受驗提要奧付

定價金四拾五錢



編纂者 巖松堂書店編輯部

東京市神田區仲猿樂町一番地

發行者 波多野重太郎

東京市神田區美代土町二丁目一番地

印刷者 白土幸力

發兌元 巖松堂書店

東京市神田區仲猿樂町

電話本局二二五四  
振替東京六五五六

(堂光三地番一目丁二町代土美區田神市京東所刷印)



# 嚴松堂書店發兌圖書目錄

## 索引

- 續刊叢書
- 論文集
- 法學通論及法理學
- 憲法及行政法(官吏法、警察、監獄、教育、交通、稅務)
- 刑法及刑事補助學
- 民法(戶籍法)
- 商法
- 訴訟法及登記法(競賣法、破產法)
- 國際法
- 工業法及特許法
- 判決例及先例
- 受驗參考書
- 諸法典
- 經濟學及財政學
- 統計及殖民論
- 銀行、貨幣及金融論
- 一般商業學
- 稅關倉庫及交通
- 保險學
- 會社及取引所論
- 社會學及社會政策
- 教育書
- 朝鮮關係書
- 嚴松堂縮刷叢書



著者	書名	冊數	定價	内地送料
●續刊叢書之部(法學論叢)				
法學博士 松本 丞治著	商法改正法評論	全一冊	一、二〇〇 <small>四</small>	二
法學士 鹽田 環著	船員	全一冊	一、一〇〇	二
法學博士 神戸寅次郎著	權利質	全一冊	一、三〇〇	二
法學士 清瀬 一郎著	不當利得論	全一冊	一、五〇〇	八
法學士 エイワタル エーリス	法律解釋學	全一冊	一、〇〇〇	八
●論文集之部				
法學博士 松本 丞治著	私法論文集	第一卷 第二卷	二、三〇〇 二、三〇〇	二二
明治大學出版部編	法學大家論文集	(民法)	三、五〇〇	一六
明治大學出版部編	法學大家論文集	(刑法)	一、四五〇	二二

●法學通論及法理學之部				
法學博士 中村 進午著	法學通論	全一冊	二、〇〇〇	二
法學博士 奥田 義人著	法學通論	全一冊	二、三〇〇	二
法學博士 岸本 辰雄著	法學通論	全一冊	一、五〇〇	二
法學士 山本 晋著	法理に關する初學者の疑問	全一冊	一、二〇〇	八
法學士 岡村 玄治著	法之眞髓	全一冊	七五〇	八
●憲法及行政法之部				
法學士 島村他三郎著	行政法要論	全一冊	二、二五〇	二
伊藤 正懋著	恩給大鑑	全一冊	二、五〇〇	二
法學士 山田準次郎著	衛生行政法論	全一冊	一、五〇〇	二



法學士	小濱松次郎著	警察行政要義	全一冊	二、〇〇	二
檢事	谷田勝之助著	警察犯處罰令講義	全一冊	一八	四
	友次壽太郎著	違警罪即決例釋義	全一冊	二〇	四
	安東鶴城著	犬の實用的研究	全一冊	七五	八
警視屬	小田明次著	袖珍警察文例	全一冊	五〇	四
法學博士	小河滋次郎著	監獄法講義	全一冊	並製 三、〇〇 二、五〇	二
法學博士	小河滋次郎評	無名氏監獄夢物語	全一冊	四〇	八
辯護士	杉田百助著	鐵道行政汎論	全一冊	二、〇〇	二
法學士	關口健一郎著	所得稅法要義	全一冊	一、二〇	二
副司稅官	安光 力著	印紙稅法精義	全一冊	六五	八
副司稅官	安光 力著	間接國稅犯則者處分法要義	全一冊	五〇	六

四

●刑法刑事補助學之部

法學博士	大場茂馬著	刑法總論	全二卷	上卷 一、八〇 下卷 一、三〇	各二
法學博士	大場茂馬著	刑法各論	全二冊	上卷 三、五〇 下卷 三、三〇	各一六
ドクトル ユース	山岡萬之助著	刑法原論	全一冊	三、二〇	一六
ドクトル ユース	岡田庄作著	刑法原論	全一冊	三、〇〇	各一六
法學博士	勝本勘三郎述	刑法講義	全一冊	總論 三、〇〇 各論 二、五〇	各二
法學士	吉田九一郎著	最新刑法問答	全一冊	一、〇〇	八
法學士	甘精勇雄著	犯罪學論	全一冊	一、七五	六
ドクトル ユース	山岡萬之助著	刑事政策策	全一冊	三、〇〇	二
法學博士	大場茂馬著	刑事政策根本問題	全一冊	一、一〇	二

五



法學博士 大場茂馬譯	陪審制度論	全一冊	一、一〇	二
法學博士 大場茂馬著	湖南事件と大浦庇護事件	全一冊	一、五〇	二
醫學士 杉江 董著	犯罪の精神病	全一冊	一、八〇	三
文學士 寺田精一著	囚人の心理	全一冊	二、五〇	三
法學博士 大場茂馬著	個人識別法 <small>指紋法</small>	全一冊	一、八〇	三
●民				
法學博士 松本丞治	註釋民法全書 <small>(全十卷)</small>	第一冊	四〇〇	八六
	第一卷 人、法人及物	第二冊	九〇	
	第二卷 法律行為乃至時效	第三冊	八五	
法學士 鳩山秀夫	第二卷 法律行為乃至時效	合本	二、〇五	二八

六

法學士 三瀧信三	第三卷 物權總則及占有權	全一冊	近	七〇	八
法學士 三瀧信三	第四卷 所有權乃至地役權	第一冊	近	七〇	
法學士 末弘嚴太郎	第五卷 留置權乃至抵當權	第二冊	近	七〇	
法學博士 乾 政彦	第六卷 債權總則 <small>(上)</small>	全	近	刊	
法學博士 乾 政彦	第七卷 債權總則 <small>(下)</small>	全	近	刊	
法學博士 神戸寅次郎	第八卷 契約總則	第一冊	近	一、七〇	三
法學士 池田寅二郎	第九卷 契約各論	第二冊	近	刊	
法學士 飯島喬平	第十卷 事務管理乃至不法行為	全	近	刊	
法學士 島田鐵吉	第十一卷 親族編	全	近	刊	
法學士 飯島喬平著	第十二卷 相續編	全	近	刊	
法學士 飯島喬平著	民法要論	全一冊	四、〇〇	一六	

七



法學士 三瀨信三著	擔保物權法	全一冊	二、七〇	一三
法學士 村上恭一著	債權各論	全一冊	三、〇〇	一六
判事 團野新之著	損害賠償論	全一冊	二、五〇	一六
法學士 牧野菊之助著	日本親族法論	全一冊	二、三〇	二二
法學士 牧野菊之助著	日本相續法論	全一冊	二、〇〇	二二
判事 繁田保吉著	改正戶籍法解說	全一冊	三、八〇	一六
檢事 山中靜次著	建物保護法釋義	全一冊	二〇	四
●商				
法學士 柳川勝二著	改正商法論綱	全一冊	三、三〇	一六
法學士 柳川勝二著	教育商法要領	全一冊	一、五〇	三
法學博士 松本丞治著	商法原論(總則)	全一冊	一、〇〇	三

法學士 片山義勝著	商法總則論	全一冊	一、五〇	三
法學士 片山義勝著	會社法原論	全一冊	二、〇〇	三
法學士 花岡敏夫著	英國新會社法論	全一冊	三、〇〇	一六
法學博士 松本丞治著	商行爲法	全一冊	一、七〇	三
法學博士 松本丞治著	保險法	全一冊	一、七〇	三
法學博士 松本丞治著	海商法	全一冊	一、五〇	三
法學士 花岡敏夫著	貨物運送之其判決例	全一冊	八五	八
法學博士 粟津清亮著	日本保險法論	全一冊	一、五〇	三
法學士 豐田多賀雄著	有價證券論	全一冊	一、八〇	三
●訴訟法及登記法之部				
法學博士 板倉松太郎著	刑事訴訟法立義	全二冊	下冊 四八〇	二一六



法學士	清水孝藏著	刑事訴訟法論綱	全一冊	一、七〇	二二
	友次壽太郎著	刑事略式手續法論	全一冊	六〇	八
法學博士	板倉松太郎著	民事訴訟法綱要	全一冊	二、五〇	二二
法學士	岩田一郎著	民事訴訟法原論	全一冊	四、五〇	一六
法學士	岩田一郎著	民事訴訟法大要	全一冊	一、〇〇	八
法學博士	板倉松太郎著	強制執行法義海	全一冊	四、七〇	一六
法學博士	加藤正治著	破產法講義	全一冊	二、八〇	一六
法學博士	加藤正治著	破產法研究	全一冊	一、六〇	二二
法學士	吾孫子勝著	競賣法論	全一冊	近刊	
法學士	的場繁次郎著	商業登記法釋義	全一冊	一、五〇	二二
判事	橫手嘉一著	產業登記關係法規講話	全一冊	八五	八

●國際法之部

法學博士	千賀鶴太郎著	國際公法要義	全一冊	三、一〇	一六
早稻田政學士	小山清一郎譯	國際法原論	全二冊	戰時 二、五〇 平時 二、八〇	二二
法學博士	立作太郎著	戰時國際法	全一冊	三、〇〇	二二
法學博士	立作太郎著	平時國際法	全一冊	五〇	六
法學士	篠田治策著	日露戰役國際公法	全一冊	三、〇〇	一六
法學博士	遠藤源六著	日露戰役國際法論	全一冊	三、〇〇	一六
法學博士	山口弘一著	日本國際私法論	全一冊	一、六〇	二二

●工業法及特許法之部

經理 校教官	三段崎景之著	工場法釋義	全一冊	六〇	八
-----------	--------	-------	-----	----	---



法學士 鹽田 環著	鑛業法通論	全一冊	一、五〇	二
法學士 清瀨一郎著	工業所有權概論	全一冊	一、六〇	二
辯護士 松本靜史著	改正特許法要論	全一冊	一、二〇	三
法學士 小西真雄譯	博士 特許法原論	全一冊	二、〇〇	三
法學士 田中鐵二郎著	商標法要論	全一冊	一、〇〇	三
東京特許代理局編	特許、意匠、商標、新案 四法正解	全一冊	一、七〇	三
●判決例及先例之部				
嚴松堂編輯部編	民法判決實例	全一冊	二、八〇	二
嚴松堂編輯部編	商法判決實例	全一冊	一、八〇	八
嚴松堂編輯部編	刑法判決實例	全一冊	一、八〇	八
中央大學發行	大審院民事判例要旨類集	全一冊	三、〇〇	一六

中央大學發行	大審院刑事判例要旨類集	全一冊	三、〇〇	一六
中央大學發行	行政裁判所判例要旨類集	全一冊	四、〇〇	一二
法學士 小疇 傳著	大審院新刑法判例要旨	全一冊	二、二〇	一二
司法省編纂	民事手續先例彙纂	全一冊	二、五〇	一六
司法省編纂	刑事先例彙纂	全二冊	正編 三、〇〇 續編 一、五〇	一六
●受驗參考書之部				
嚴松堂編輯部編	外交官高等官 判檢事辯護士 各官私立大學 試驗問題集	全一冊	六五	八
嚴松堂編輯部編	增補法律經濟論題輯覽	全一冊	一、五〇	八
法典質疑會編	法典質疑錄	全三冊	各 五〇	各六
法典質疑會編	續法典質疑錄	全一冊	七五	八



巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	
官途受驗案內	外交官受驗提要	警察官吏受驗提要	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	普通文官及 裁判所書記 試驗最近問題集	
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
六〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
八	四	四	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六

巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編	巖松堂編輯部編
官廳簿記法	現行警察法規全書	現行警察法規全書	日本衛生法規大全	新舊商法對照	改正日本商法	刑事訴訟法	對民法	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書	現行警察法規全書
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
一、二〇	一、四〇	一、四〇	二、八〇	二〇	一五	四〇	刊	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八	一八
八	四	三	一六	六	六	六	六	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四

●經濟學及財政學之部

●法典之部



法學博士 石川義昌譯	法學博士 小林丑三郎著	法學士 吉田舜天丸著	法學博士 小林丑三郎著	法學博士 小林丑三郎著	法學博士 小林丑三郎著	商學士 瀧本美夫著	法學博士 小林丑三郎著	法學博士 松岡均平著	法學士 青木得三譯
マニグ 氏	セリグ 氏	マニグ 氏	セリグ 氏	セリグ 氏	セリグ 氏	セリグ 氏	セリグ 氏	セリグ 氏	セリグ 氏
經濟原論	經濟學評論	經濟學問題解説	財政學提要	殖民地財政論	地方財政學	財政學講義(上卷)	財政、整理論	最近經濟思潮之變遷	北米合衆國經濟事情
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
三、五〇	二、八〇	七五	二、五〇	一、六〇	三、〇〇	一、五〇	一、二〇	近刊	一、〇〇
一六	一六	八	一三	一三	一六	一三	八	三	三

●統計及殖民之部

法學士 財部靜治著	法學士 廣中佐兵衛著	マニグ 氏	法學博士 堀江歸一著	法學博士 矢作榮藏著	法學士 青木得三著	法學博士 小林丑三郎著	●一般商業學之部	服部文四郎著
社會統計論綱	獨逸殖民新論	支那に於ける獨逸の經營	中央銀行と金融市場	不動產銀行論	貨幣論	庶民金融談	高等商業教育論	早稻田大學教授
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	一、三五
二、〇〇	一、〇〇	八〇	二、〇〇	七五	一、五〇	一、三〇	一、三五	一七
三	三	八	三	八	二	八	二	

●銀行貨幣及金融論之部

●一般商業學之部



岡崎孝一著 川村善輔著	商業の理論及實務	全一冊	一、三〇	二
松崎壽著	最新商業算術	全二冊	上卷七〇 下卷七〇	各八
經理學 校教官 三段崎景之著	重要商品學講義	全一冊	一、七〇	一六

●稅關倉庫及交通之部

商學士 松崎壽著	商業政策	全一冊	一、〇〇	二
商學士 小林行昌著	關稅	全一冊	三、〇〇	一六
商學士 小林行昌著	倉庫及稅	全一冊	二、〇〇	二
早稻田大學教授 伊藤重治郎著	海運論	全二冊	上卷二〇〇 下卷二〇〇	二

●保險學之部

法學博士 粟津清亮著	保險學綱要	全一冊	二、五〇	一六
---------------	-------	-----	------	----

保險事務官補 中島好太郎著	保險總說	全一冊	一、六〇	二
法學博士 粟津清亮著	保險講話	全一冊	一、五〇	二
惣崎貞夫著	生命保險通解	全一冊	一、三〇	二
恩田長藏著	火災保險業より見たる東京市	全一冊	二、五〇	二
半名龜次著	火災保險	全一冊	一、三〇	二
角田總夫著	火災保險	全一冊	一、三〇	二

●會社及取引所論之部

商學士 兒林百合松著	會社論	全一冊	二、〇〇	二
法學博士 佐野善作著	取引所投機取引論	全二冊	上卷二七〇 下卷近刊	二
商學士 清水吉松著	米穀投機論	全一冊	二、〇〇	二
法學士 豐田多賀雄著	有價證券論	全一冊	一、八〇	二

●社會學及社會政策之部



文學士	今井政吉著	社會本位と個人本位	全一冊	一、五〇	二
法學博士	上杉慎吉著	婦人問題	全一冊	一、〇〇	八
	市場學而郎著	賣笑婦研究	全一冊	四〇	六
	山本美越乃著	勞働問題	全一冊	六〇	八
	田中太郎著	歐米感化救濟事業	全一冊	二、〇〇	三
●教育書之部					
文學士	寺田精一著	危機に富める青年兒童期	全一冊	一、〇〇	三
	脇田良吉著	低能兒教育の實際的研究	全一冊	二、五〇	三
●朝鮮關係書之部					
朝鮮總督府編	朝鮮法令輯覽	全一冊	九、五〇	二四	
法學士 永野清著	朝鮮行政法要論	全二冊	各論 一、〇〇	各八	

法學士	永野清著	朝鮮警察行政要義	全一冊	二、〇〇	二
	田口春二郎著	朝鮮巡查受驗準備書	全一冊	六〇	六
	田中定平著	土地調査と地主	日文文	各	四
	佐藤碌堂著	朝鮮語學捷徑	全一冊	五〇	四
	大場兼治著	朝鮮産業地圖	折本	一、八〇	八
	山口豐正著	朝鮮之研究	軸製	二、五〇	二
	山口豐正著	朝鮮之研究	全一冊	二、三〇	二
●巖松堂縮刷叢書之部					
法學博士	志田卸太郎著	商法總論	全一冊	六〇	六
法學士	柳川勝二著	相續法要論	全一冊	六〇	六
法學博士	松岡義正著	特別民事訴訟法論	全二冊	各	各六
法學士	青山衆司著	商法總論	全一冊	六〇	六



法學博士	板倉松太郎著	民事訴訟法論	全七冊	各	六〇	各六
法學博士	橫田秀雄著	物權法論	全二冊	各	六〇	各六
商學士	兒林百合松著	簿記學原論	全一冊		六〇	六
	堀川美哉著	社會保險論	全一冊		六〇	六
法學士	島村他三郎著	行政法總論	全一冊		六〇	六
法學博士	市村富久著	海商法論	全三冊	各	六〇	各六
法學士	牧野菊之助著	親族法要論	全一冊		六〇	六
法學博士	粟津清亮著	保險法論	全一冊		六〇	六
法學士	嘉山幹一著	民法總論	全二冊	各	六〇	各六
法學博士	橫田秀雄著	債權法總論	全二冊	各	六〇	各六
法學士	立石謙輔著	裁判所構成法論	全一冊		六〇	六

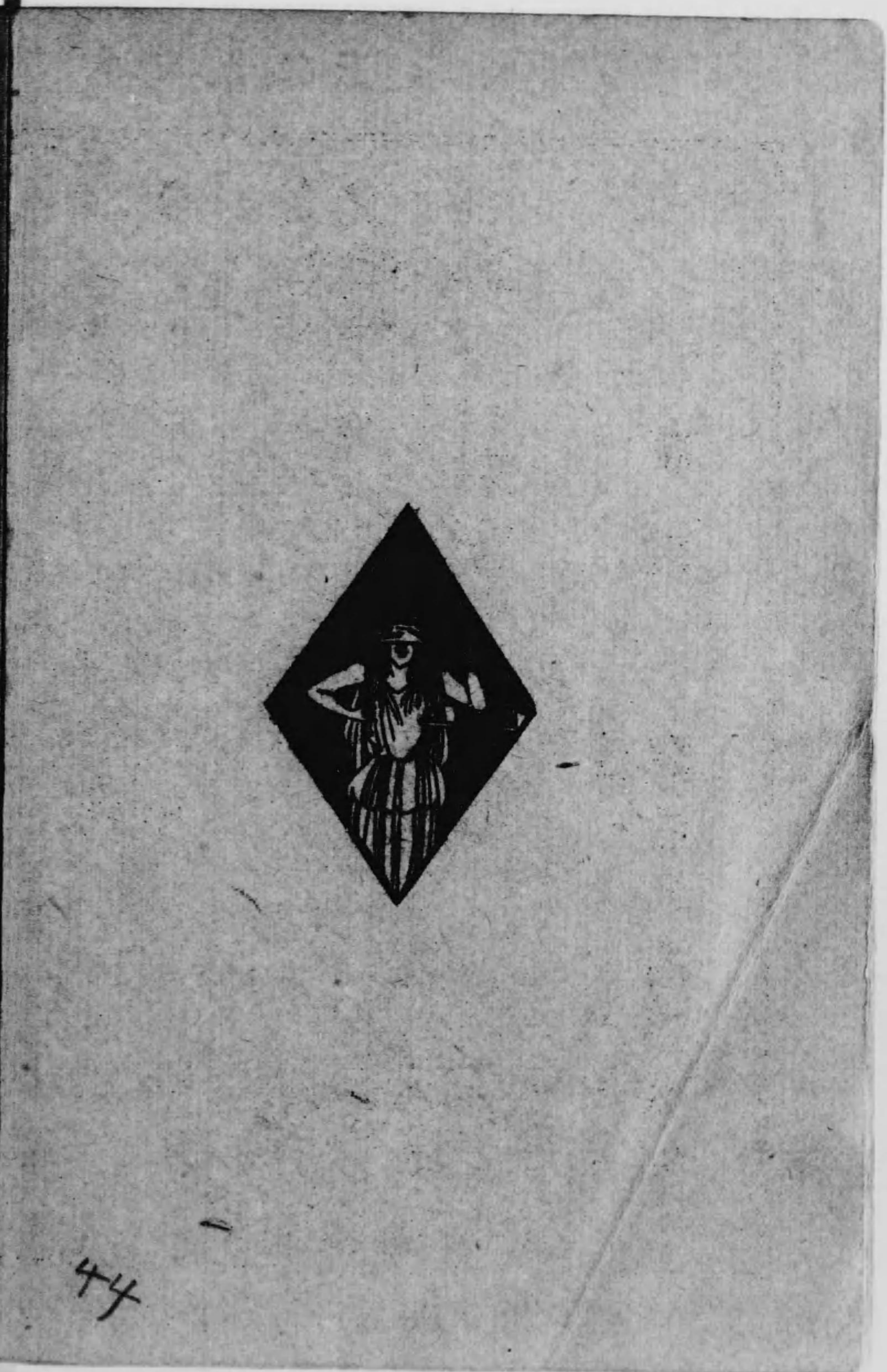
法學士	柳川勝二著	人事訴訟手續法論	全一冊		六〇	六
法學士	須賀喜三郎著	手形法論	全一冊		六〇	六



# 最新刊圖書目錄

青木學士著	板倉博士著	巖松堂編輯	松本博士著	小林學士著
貨幣論	強制執行法義海	刑法判決實例	私法論文集 第一卷 第二卷	倉庫編
總布上製本全一冊 定價金壹圓五拾錢 內地送料金拾貳錢	春草上製本全一冊 定價金四圓七拾錢 內地送料金拾六錢	總布上製本全一冊 定價金壹圓八拾錢 內地送料金八錢	春草上製本全二冊 定價各貳圓參拾錢 內地送料各拾貳錢	總布上製本全一冊 定價金貳圓 內地送料金拾貳錢





44



362

27

10.10.13



終

